

らが相前後して負傷、井原中尉に代わって指揮をとった福田寅造少尉が戦死した。

第一峰の前面、三七一・〇高地を奪取し、確保している第七中隊に対し、左斜面から約一個中隊の敵が逆襲してきた。背中にカラカサを背負った敵兵は、チャルメララッパを吹き、腰に銃を構え撃ちながら勇敢に肉薄してくる。配属の重機が必死に撃ちまくる。たちまち十数人の敵兵が急坂をころげ落ちて行く。いったん退いたが、再びしやにむに突っ込んでくる。しかし、有利な地形で待ち構えているわが重機に、いたずらに死体を残して敗走した。これを境に、敵は全線にわたって動揺を始めた。

三浦第二大隊長はすぐに同高地に大隊本部を進め、第五中隊の市川小隊を第一峰四八八・五高地の北方から背面をつかせ、二個小隊を予備隊とした。

また、同隊に協力するため、前夜から第二峰東方をウ回して陣地変換中の連隊砲中隊も北方りよう線に進出、重砲陣地の右前方に陣し第一峰およびその北方から増加中の敵軍に対し砲撃を開始した。

第一峰四八八・五高地前面の主要陣地を奪われた敵は、第一峰頂上のトーチカ、ふもとのペトン製トーチカ、えんがい壕から迫撃砲、重機、チェコで猛烈な最後の抵抗をいどんできた。死守する気だ。第七中隊は、敵前三百に迫りながらも身動きもできない。

(四) ついに紫金山落ちる

——「最後の戦争だ」で勝利——

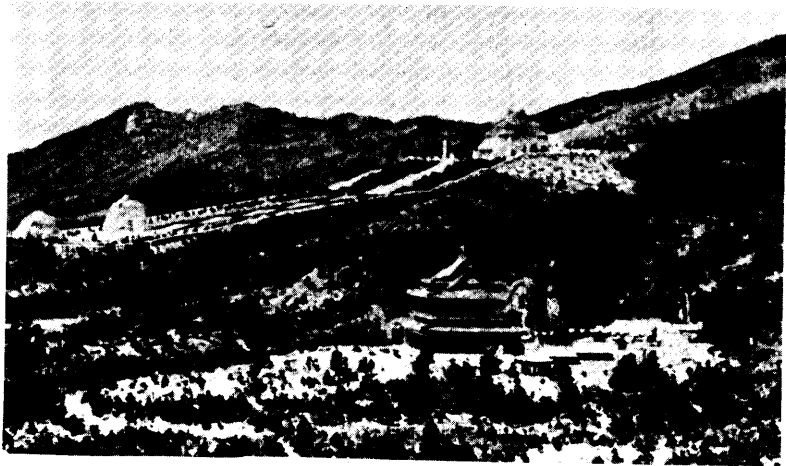
第七中隊のクギ付け状態を見た三浦第二大隊長は重火器に集中援護を命じた。連隊砲、大隊砲、速射砲

はもちろん、上五旗西南方に陣取っている配属砲兵が相当量の鉄量をぶち込む。たちまち土煙を吹き上げる敵陣。このスキに第一線は前進する。

一方、野田連隊長は是が非でも今日中に第一峰を落とすべく、とっておきの予備の第二中隊を第一線に投じ、さらに午後五時過ぎには軍旗および連隊予備（このころ予備は第十中隊の二小隊だけという最小限度）も第一線のバラバラ松高地まで前進させ、自ら第二峰西端に立つて第一線を偵察している。

大隊長は増加された第二中隊のてき弾筒一個分隊を第七中隊の指揮下に入れ、さらに川戸第七中隊長の要請で永峰工兵小隊を派遣した。同中隊は同五時三十分突撃を開始、ふもとの敵陣を奪取した。これを見た砲兵が第一峰頂上に射撃を再開する。これで敵の抵抗はほとんど途絶えた。同中隊はそのまま一気に頂上にかけて上がり、第一峰を完全に占領した。時に午後六時。

激闘三日間、ついに紫金山は郷土部隊の手に落ちたの



紫金山の全景

である。

第二大隊はさらに第一峰西方あん部に進出し、払暁攻撃のため天文台高地の敵情地形を偵察した。また、第三大隊は第一線の第九中隊がバラバラ松高地を奪ったものの、その後はこう着状態だった。このため連隊長は、軍旗および予備隊をその場に待機させておき、日没後自らバラバラ松高地に移動、同八時連隊命令を出し、攻撃を続行、早く敵を撃破するよう第三大隊を督励した。ガン強に抵抗した敵も夜半から退却を開始、同大隊は天文台高地向け追撃に移った。

一方、十一日午前三時、右側支隊に配属を命じられた第一大隊は同七時出発、仙鶴門鎮で右側支隊長の指揮下にはいった。同大隊は支隊予備となり、一部を馬宮東側高地および楊坊山西端に對して警戒させ、主力は東馬頭で露營した。翌十二日、支隊の先遣大隊となつて出発、馬宮付近を経て十字街子家宮付近に進出、和平門、中央門から退却中の敵退路をしゃ断せよとの命で、午前九時堯化門西端に出た。午後零時



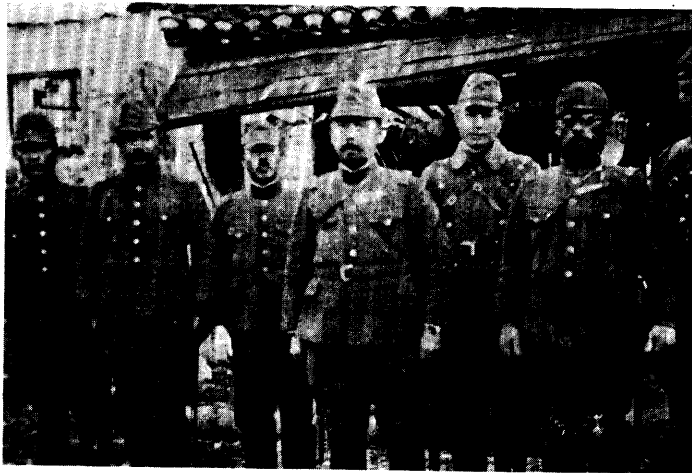
紫金山の山頂に立て
られた占領碑

十分、標高四五七・四高地を奪取、次いで同二時五十分十字街東方高地に進出、そこで三十八連隊長の指揮下にはいり露營した。

三十三連隊は第一大隊を右側支隊に手放し、しかも馬の背のような険しい地形で兵力の集中がむずかし
く、わずかに二千四百二十一人（うち将校四十五人）Ⅱ数字はいずれも十日から十四日までⅡという兵力で
南京の要害・紫金山を占領した。

敵は同山一帯に永久陣地を築いていたが、南北両方向に重点を置き、東方稜線は比較的手薄だった。この弱点を見抜いた野田連隊長は第三峰、第二峰、第一峰の順に攻撃した。この作戦がよかった。予想を裏切られた敵は、あわてて連隊正面に陣地を急造、兵力を増加した。だが、陣地の作り方がま
ずく、スキ（死角）が多かった。そのうえ小松や岩角が多くて、わが方を確実に掃射することができなかった。中国軍得意の迫撃砲、重砲も稜線にあまり落下しなかった。このため、連隊は戦死四十（うち将校三）、負傷百六十四（同五）と比較的少ない損害ですんだ（いずれも第一大隊を除く）

弾薬量の差が、連隊に苦戦を強いた。敵の機銃弾、小銃弾はもちろん、中でも手投げ弾は驚くほど豊富だった。惜し気もなくどんどん使った。わが方も節約をゆるめたが、なにしろ絶対量が少なく、とくに山上での手投げ弾不足はある程度



野田連隊長の巡視（南京城外珠璣閣）

將兵の士氣に影響した。使用彈藥は小銃四万一千発、機關銃二千四百発、重てき彈筒三百五十発、大隊砲百三十発、拳銃二百発、速射砲、連隊砲ともに二百余発、手投げ彈はわずか二百八十七発だった。しかも、この数は十四日の南京掃討も含めてである。

繰り返して述べたことだが、険しい地形をおかして第一線に進出した連隊砲、大隊砲、速射砲、連絡を保持した通信班、常に第一線を希望する中隊長、重傷しながら後送をこばむ將兵等々、連隊一丸となつての戦い、首都南京陥落のカギはわれわれが握っている、最後の戦争だ」という將兵の士氣——これが戦勝の大きな要素であつたことはいうまでもない。連隊と同配属部隊は感状を授与された。

(五) 紫金山攻略の日が：

——兩陣に悲壮な空氣——

すでになくなられたが、久居市森町の西田優さんは、当時第二機關銃中隊（島田勝巳大尉）第二小隊（三輪英雄少尉）第三分隊長代理（上等兵）だった。

十二月十二日、前日は第六中隊に配属されていた第二小隊は、この日は第五中隊に配属された。前日の夕方、ざん壕（ごう）で死んでいた敵から外とう（套）と背負っていた焼き米（布袋入り）を奪った。おかげで今日は寒さも空腹も少しはしのげた。焼き米をかじつたのでむしようにのどがかわくが、水筒には一滴の水もなかった。南京の要塞（さい）紫金山攻略もいよいよ最後の日か——敵味方の陣地とも悲壮な空氣がみなぎっている。空もどんより曇り、いつそう重苦しい。機關銃小隊は紫金山東側八合目位の絶壁を

アリのようにほふく前進する。この間にも遠く近く、両軍の銃砲声は絶え間なく響いている。なにしろ険しい岩山なので、数時間かかって、やっと百メートルしか進めない。敵迫撃砲弾がヒュル、ヒュルと気味悪く頭上を通過、二、三秒後に後方右下に黒煙をあげてサク裂する。山の向こう側、つまり南京城内の敵が、山越しに下麒麟門付近の南京街道を進撃中の友軍に砲撃を加えているのだ。

空腹と疲労、睡眠不足の極に達したからだを少しでも休めようと岩かげを探すが、一帯は絶壁だ。からだを横にする場所などとてもない。かといって、前進を続行しようとしても、前方第一峰のトーチカからは間断なくチェコ機銃が火を吐いており、まったくどうすることもできない。このころ、後方約百五十メートルに通信隊が前進してきた。だれかが「前方高地の敵陣を砲撃するよう、後方部隊に連絡頼む」と叫んだ。次々と口頭連絡されていく。「日の丸を出せ」とだれかが叫んだ。敵との距離約三百、同士打ちされる危険がある。友軍砲兵陣地から見えるよう、岩かげに日の丸を広げた。待つこと四、五分。

ドガンッ

敵陣二十メートル前方にわが砲弾がサク裂、続いて二発、これは敵陣に命中、西田上等兵らは、頭からバラバラと破片や石ころを浴びながらも「やったり」「万歳」と喜んだものだ。あとは連続十数発、食いつくように敵陣にサク裂、さすがの敵も鳴りをひそめてしまった。頭を上げると、敵兵がう

故 西田 優さん



ろろ退却を始めた。「それッ」意気込んで重い機関銃を稜（りよう）線に引きずりあげる。

いまは疲れも吹っ飛んだ西田分隊長代理「距離三〇〇、退却する敵撃てッ」射手の肩をたたく。
ダダダダ……

快音が腹にこたえた。射手は引き金をしばったまま、まるでホースで水を浴びせるように敵をなぎ倒す。銃身がたちまち真つ赤に焼けたが、冷やす水がない。弾薬装てん手も汗を流して懸命にタマを送る。双眼鏡をのぞいた西田分隊長代理は思わず会心の笑みを浮かべた。

そのとき、

「二分隊はどこを撃っているか」と三輪小隊長が近づいてきた。

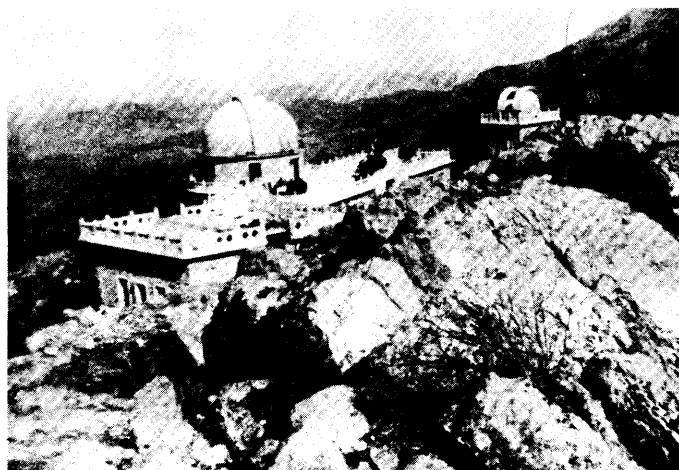
「二分隊は高地の退却する敵、よく命中します」

と答えると、小隊長は眼鏡を取り出すのもどかしく、稜線から頭を出し、

「どれどれ」

と眺めていたが、

「ワツハツハツハツ……」



南京城外の天文台

と高笑い。

「ふむ。おもしろいほど当たるのう。愉快、愉快……」

とエツにいった瞬間「うーんッ」と西田分隊長代理に寄り添うようにのけぞった。すぐ抱きかかえたものの、絶壁で身動きができない。

「小隊長殿がやられた、みなこいッ」

と叫ぶ。時に午後三時。「中隊長殿に報告せよ」と伝令に命じ、分隊員には石ころを積んで上体だけ横にできる場所をつくらせる。素早く銃剣でけん銃、ずのう、水筒の皮ひもを切り胸を開く。傷は左肩から右肩へ貫通銃創。右肩の射出口は大きく割れ、ぶくぶく鮮血を吹き出している。動脈をやられたらしい。包帯包みを出し、ガーゼを当てたが、傷口にすっぽりはいつてしまったほど。出血は止まらない。小隊長は右腕を動かし「痛いッ」とうめいた。「衛生兵はおらんか。軍医はいないかッ」と叫んだが応答がない。五中隊の方でも負傷者が続出しているらしくこちらまで手が回らないようだ。

(六) 三輪少尉、紫金山に散る

——無念晴らす「約束」——

重傷を負い、岩石の上に横たわる三輪小隊長はからだが痛からう、と西田分隊長代理はきのう敵兵から奪って着ていた外とうをぬぎ、そつと小隊長のからだの下に敷いた。三輪小隊長の顔はみるみる血の色を失い、意識も薄れていく。だが「しつかりしてくださいッ」と励ます以外にどうしようもなかった。冬の

日は暮れやすく、紫金山に夕やみが立ちはじめた。その夕やみの中へ吸い込まれるように三輪英雄少尉は息を引きとった。

西田優第三分隊長代理は、薄暮を利用して死傷者の処置を第五中隊と協議したが、同中隊も死傷者が多く、これから収容するための道を作るのだと各兵は十字鋏を持っている。大陸の冬、しかも山の夜は急激に寒さが加わってくる。三輪小隊長は当時見習士官で三十歳近かったろうか。ふだんは控え目な人だが、典型的な軍人だった。勇敢で、部下には親切だった。小隊長は四、五人代わったが、西田分隊長代理はこの人を最も信頼していた。だが、小隊長は戦死した。いまとなつては、小隊長のアダを討つのが生き残つた部下のつとめだ。

いつか東の空に月がのぼり、あたりを青白く照らし出した。「小隊長殿、きつと無念を晴らして見せます。



故 三輪英雄少尉

わたしが貸した外とうを返してください」まるで生きた人に話すように、死体を抱きあげ、小隊長のからだの下に敷いてあった外とうを取ろうとした。そして（あつ）と口走った。外とうにたまっていた血がザザーと音をたてて紫金山の岩間にしみ込んで行つた。（こんなに出血多量では、とても助からなかったのだ）思わず黙とうした。血のたまっていたのはその部分だったので銃剣で切り捨て着用した。

やがて四八八・五高地への前進命令が下った。分隊員二人に小隊長の死体の処置を頼み、月明かりを利用して一步一步高地に向かった。途中、だれかが「右の谷へ行つて見よ。敵の死体で谷が埋まっているぞ」と話し合っている。西田分隊が昨日今日なぎ倒した敵だろう。

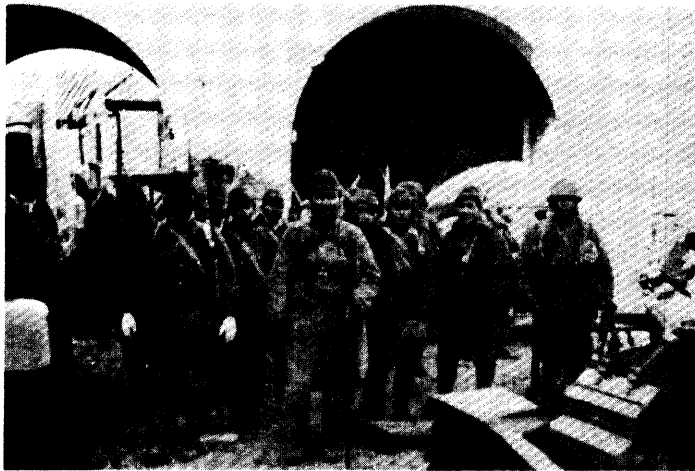
四八八・五高地、つまり第一峰を占領したのは午後六時だった。見降ろせば、はるか左下に南京城の灯が点々と見えた。高地の敵陣を調べると、それはコンクリートで固めたトーチカだった。友連砲兵の砲弾サク裂の跡が生々しく、火薬のにおいが漂っていた。そんな場所で、兵士たちは寒風にさらされながら、わずかにからだを横たえ次の命令を待った。

西田優さんは昭和四年入隊、満州駐在に参加。十二年八月充員召集、十三年十月病気で内地に帰る。十九年五月再び応召、海軍に配属されパラオ島警備、軍曹、二十年三月復員した。



第二機関銃中隊長のち連隊副官だった津市大谷町、島田勝巳さんは生前、紫金山攻略について次のように語っていた。

「首都南京の要害を占領しただけにその意義は大きかった。



中山門に突入したわが部隊

將兵も張り切っていた。戦鬪としてはあとの武漢攻略戦・大別山の戦いの方が苦しかったが、やはり南京は敵首都であり、攻城戦であり、花やかにその武勲をたたえられたものだった」



野砲第二十二連隊の大隊本部書記軍曹で、郷土部隊を援護した鈴鹿市稲生町、樋口忠治さんは「敵と友軍第一線の間がわずか百メートルに接近しているので思うように射撃できなかった。三十三連隊の將兵が抜刀し、銃剣をきらめかせて突撃する光景はまったく勇壮であり、悲惨だった」と語っている。

(七) 必勝と部下の信頼

——市川小隊戦死者なく戦い抜く——

小隊を指揮した一カ年半の期間中、紫金山はじめ多くの激戦に参加しながら、一人の部下も戦死させなかったというのが一志郡嬉野町上野、市川治平さんであった。

第一峰攻略のあらましで述べたとおり三七一・〇高地を奪取した三浦大隊長は、すぐに大隊本部を同高地に進め、第一峰四八八・五高地の敵陣に対し第七中隊が正面から、また第五中隊の市川小隊には右第一線同高地の北方から背面を突くよう命令、二個小隊を予備にした（十二月十二日）

市川古参軍曹指揮の一小隊兵力は三十六人（なお大原准尉の二小隊は三十四人、三小隊は三十三人程度に消耗していた）午後四時ごろ、重機関銃の援護射撃のもと市川小隊は行動を起こした。装具を捨て、水筒と付け剣した小銃だけの軽装でほふく前進を開始、同高地の右側を進む。援護の重機は超過射撃をやっ

ているから、ほふく前進する歩兵のすぐ頭の上を、後ろからピュン、ピュン飛んで行く。不注意に頭をあげようものなら、たちまち味方の機銃弾を浴びてハチの巢だ。

敵も盛んに応射してくる。岩と岩の間に身を伏せ、ヤモリのようにじりじり敵陣に迫る。敵前百メートル以内。
「突撃ッ！」

市川小隊軍曹は号令して真っ先にとび出した。手投げ弾、腰だめ射撃を併用しての突撃だ。突撃ラッパが鳴りわたり、

「わあーッ」

兵士たちは大喚声をあげて次々敵陣におどり込む。投げる（手投げ弾）撃つ（銃）突く（銃剣）の果敢な突撃の前に、敵は三十六個の死体を残して敗走して行った。

もう夜のとぼりが降り始めた。同高地正面では川戸中隊が突撃中だ。高地の背後に出た市川小隊は、地雷原に踏み込む危険を避け、ひとまずその場に待機することにした。

二時間もたったころ、

「わあーッ」

数十の敵が逆襲してきた。小隊は直ちに散開応戦、間もなく撃退した。だが、敵手投げ弾が市川小隊長の近くでサク裂、市川小隊長はアゴに、後ろにいた部下二人がそれぞれ



軍服姿の市川治平さん

れ軽傷を負った。

市川軍曹が部下を戦死させなかったのは第一に、どの戦闘でも常に敵を包囲するような形で突撃をかけたこと、次に大隊長命令より最前線にいて、敵情、地形を知っている自分の判断に確信を持ったこと、第三に重火器の援護射撃中に前進したこと。普通、重火器で敵陣をたたいたあと突撃に移るが、市川小隊長は援護射撃中、敵のひるんでいるスキに乗じて突っ込み、かえってあわてた味方砲兵が撃ち方やめをする場合が多かった。「味方のタマで死ぬのは本望だ」次に手投げ弾幕をくぐって腰だめ射撃と突き併用の突撃戦法をとったこと。徐州戦のあと三浦大隊長命でこの戦法をさらに研究した。成功のカギは必勝の確信と部下の信頼である。

中隊編成のとき百八十人中、百二十人までが市川軍曹の顔見知りの兵だったという。市川小隊長が信頼した部下のひとりは一分子隊長、古川政男上等兵(伊勢市辻久留に在住、既述)だ。

市川さんは昭和九年の入隊、チチハルに駐屯。十年十二月に仙台の陸軍教導学校入校、十一年十一月卒、伍長で三三の



紫金山から大平門に移動する将兵たち

第五中隊に戻る。十二年から十四年まで支那事変参加。十五年百三十三連隊に応召、さらに十六年百十六大隊（和歌山で編成）で中支の安慶へ、十八年シナ派遣軍歩兵教育隊（将校教育）付き准尉で任務中、湯水鎮の同学校で終戦。

軍恩連盟の歌

「（二節）中村川の水清く、雲出の流れ伊勢の海、注ぐよく（沃）野に生をうけ、はたちに徴兵あるいはまた御国の要請身を置くや、日夜銃をとる勇ましき」（二―五節略）を作詞した人でもある。

（八）「地雷原」が目前に

――ほふく前進で敵陣迫る――

勇敢に突撃し、紫金山第一峰頂上に日の丸をひるがえした一志郡美杉村下之川、野村嘉忠さん（農林業）の殊勲甲に輝く奮戦記。上等兵で、第七中隊の第一分隊長代理だった。

十二月十二日、第一峰前面の、二陣に構えた主要陣地三七一・八高地をおとし入れた川戸正巳准尉（亀山市・故人）指揮の第七中隊（二個小隊）は、さらに最後の堅陣、第一峰四八八・五高地前方約三百メートルの地点まで肉薄した。しかし重要な前面陣地を奪われた敵は、第一峰頂上のトーチカ、ふもとのペトン製トーチカ、えんがい壕、散兵壕から迫撃砲、機関銃の十字砲火でがん強な最後の抵抗をいどんできた。しかも中隊の目の前の一帯は地雷原だ。第一峰を眼下にしなから、一步も前進できない。銃の先に鉄カブトをかぶせ、壕からちよつとのぞかせると、たちまち敵弾が食いつくほどだ。

「逃げぬのお、敵は」

と野村上等兵らは齒がみするばかり。先の無錫（むしゃく）の戦闘で、分隊長、井戸浦軍曹が負傷、野村上等兵は分隊長代理をつとめていた。やがて、ガン固で有名な太田尚一等兵（三重郡出身）がたまりかねてごそごそ動き出した。

「太田、いま動いたらやられるぞ。敵のタマ道が変わったらや（突撃）るから待て」と注意する。だが、彼はそれを振り切つて、ちよつとからだを浮かした。とたん

「うッ！」

頭を射貫かれ即死した。ほかに二、三の部下がのけぞる。

「動くなッ」

と大声でどなる。

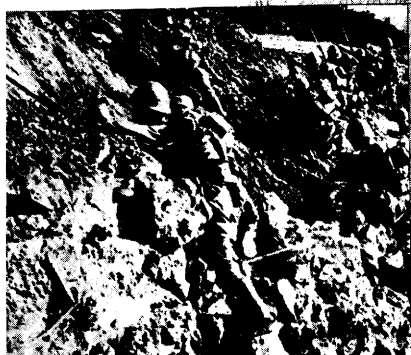
こうした第一線の苦戦を見た三浦大隊長が重火器に援護射撃を命じたことは述べたとおり。待つ間もなく、これら友軍の砲弾が七中隊兵士の頭上にうなりを残し、次々敵陣に飛び込む。煙や土煙が巻き上がる。敵がひるむスキに、行動を起こした兵士たちは、木のほ

南京攻略の武勲

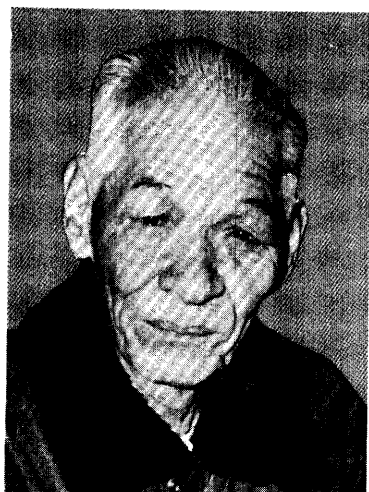
朝香軍司令官宮殿下

野田部隊に感状を賜ふ

協攻部隊と共に上陣に達す



㊦ 南京攻略の武勲を報じた当時の新聞
㊧ 紫金山北壁より攻撃するわが隊



野村嘉忠さん

とんだない岩山をほく前進で敵陣に迫る。

がん強な敵の抵抗に手間どっているうち、太陽は西に傾き、夕やみが戦線を包み始めた。第一峰の敵情偵察をしていた川戸中隊長は、ふもとに高さ一・二メートルの屋根形鉄条網があるのを発見、直ちに工兵隊の派遣を要請する。やがて永峰広信少尉指揮の工兵小隊が敵弾をぬって到着。爆薬を背負った工兵隊はすぐに死角の左斜面からウ回し、まずベンチで鉄条網を切断、突撃口を開く。敵はまだ気付かない。

川戸中隊長は砲兵に射撃中止を要請、すかさず、

「突撃ーッ」

と号令して軍刀を振りかざして真っ先にとび出した。突撃ラッパが鳴りわたり、

「わあーッ」

兵士たちは大喚声をあげながら、しゃにむに突っ込んで行く。敵兵はラッパを聞いただけで、戦意を失い天文台に通じる軍用路をころげるように逃げて行く。重、軽機がこの敵をなぎ倒す。銃眼の死角からトーチカにとりついた野村上等兵は、す早く手投げ弾を投げ込む。トーチカは外からカギをかけられ、中の兵は逃げられないようクサリでしばられている（これじゃ死にもの狂いで抵抗するはずだ）工兵隊も爆薬を仕掛けては次々爆破する。七中隊がふもとの陣地に突入すると、砲兵が第一峰頂上めがけて猛砲撃を再

開、兵士たちはその援護のもと、ふもとの敵陣をおどり越え、一気に頂上へ突っ込む。敵の抵抗はほとんどない。日の丸を持っていた三分隊の鈴木信三上等兵（四日市出身、ビルマで戦死）が、

「おれはもう……」

と荒い息。

「よし、おれに渡せ」

野村上等兵は日章旗を引つたくと、猛然と頂上に突進する。敵射撃の目標になるので、日の丸を持つのはいやがられたものだ。敵陣に仁王立ちとなった野村上等兵は、腕も折れよと日章旗を打ち振った。

「バンザイ」

兵士たちは涙を流し、抱き合つて歓声をあげた。激闘、死闘三日間、ついにわが将兵は要害紫金山を完全占領したのだ。時に午後六時、南京城は眼下のヤミの中にあつた。

日章旗を打ち振る野村上等兵の雄姿が、朝香宮軍司令官（第二軍）の双眼鏡にはいり、間もなく酒のはいつた水筒と乾メンパンが野村上等兵に贈られた。『朝香』の文字が刻まれた水筒の酒、その味はいまでも忘れられない。野村さんは昭和九年入隊。チチハルに駐とん。十二年召集。十六年八月の大動員で三十三連隊と比島へ（一年半）二十年七月三たび召集、岐阜県の南小学校で終戦。軍曹。現在は下之川区長、雲出川漁業組合長もつとめている。

(九) 中隊に「恩賜の酒」

——中
上等兵村 紫金山頂で新妻思う——

松阪市、中村斎一郎さんの生前の忘れ得ぬ話。上等兵で第五中隊に属していた。

紫金山を占領した連隊に「恩賜の酒」が出た。各中隊から二人ずつ代表を出し、大隊ごとにまとまって、四、五^五後方の師団司令部へ受け取りに行くことになった。第五中隊からは一番年をとっている（昭和二年兵）中村上等兵が出ることになった。疲れ切っていたが光栄に思い、足腰をふんばって山を降り、かれこれ二、三時間かかって酒を受け取って帰った。各小隊あて水筒一ぱい（約一リットル）の分量だった。



故 中村斎一郎さん

すでに夜半、恩賜の酒で元気をつけた連隊主力は、大平門方向めざし行動を起こした。第五中隊の一個小隊だけにとどまって第一峰頂上を確保することになり、中村上等兵がその小隊長代理を命じられた。連隊主力の出発に先立ち、第六中隊が先兵として出ており、同中隊にはまだ恩賜の酒が渡っていないかった。このため中村上等兵は一分隊をさき、酒を持たせて先兵中隊を追及させた。

連隊主力が去ってしまった最高峰は、いっそう静まり返

り寒気が身にしみる。紫金山頂にあるのは中村上等兵の一個小隊（一分隊欠）だけであつた。時々、日の丸が夜風にはためく。その音だけが、心強い。折り重なる敵兵の死体をかき分け、自分のかがみ込む場所をつくる。歩哨を立てておき、自分は銃を抱いて目を閉じる。

戦闘中はみじんも思ひ出さなかつた妻の顔が浮かんた。召集前に結婚したばかりである。子供が腹にいるはずだつた。後備兵だが現役に負けるものかと、いつも先頭に飛び出したものだ。無錫の時も、すすんで決死隊に出た。それでも、これまで無傷だつた。おれは忠実に戦つてきたと思う——うとうとすると、もう空がしらんできた。

中村上等兵の小隊は、敵兵の死体をさぐつてイリ米を抜き取り、飯ごう炊さんにかかつた。天文台方向へ通じる道に、敵が捨てて行つた水をつまつたカンがころがつていたはずだ。部下の兵二人が「取つてきます」と軍服をぬぎ捨て、シヤツ姿で出かけて行つた。ものの五分とたたぬうち、

ダン、ダーンッ

二人の行つた方角で数発の銃声が起こつた。（すわ、敵襲か？）小隊は銃をとつて緊張する。しばらくすると、数人の



敵陣に肉薄前進する兵隊

姿が天文台方向から現われた。よく見ると友軍だ。三十八連隊の將校斥候だ。しかも、彼らの肩に背負われているのは、朱に染った二人の部下ではないか。

「どうしたか」詰め寄る中村上等兵の前に血の色を失った少尉が、

「すまぬことをした。敵と間違えて発砲してしまった！」

「なんだってッ」

中村上等兵はかつときて、階級の差を忘れた。

「キ、貴様ッ、あきめくらか。ここにひるがえっている日の丸が見えないのかッ」

「……………」

相手の少尉は、ただ頭を下げるばかりだった。中村上等兵は大粒の涙をぼろぼろこぼし、重傷にうめく部下の前にひざを折った。

その日夕方、中村小隊は陣地を撤し山を降りた。四囲の状況から判断して敵に奪取される恐れがなくなつたからである。下関（シャーカン）の宿舎にたどりつき、中隊長に報告した。このとき、チャンチュウをきこしめした三浦大隊長が「中村、先兵中隊に恩賜の酒が届いていないぞ」とどなった。自分のまかされた小隊から一個分隊をさいて、先兵中隊を追及させたはずだ。いまだに酒が渡っていないとなると、途中で敗残兵に襲われたか。いずれにしても恩賜の酒が行き渡ってないとするとならば一大事だ。果たして大隊長、「貴様、そこへ座れ。首をはねてやるッ」

カンカンに怒って、軍刀でどんどん床をたたく。間もなく中隊長が「酒は六中隊に渡りました。やはり

途中で敗残兵にやられ、追及に手間どっていたそうであります」と報告してくれたので、やれやれ命拾い(?)した。

中村さんは十四年ガイ旋し、召集解除となった。「同士打ちに会った兵はまったく気のどくで、相手将校をなぐりつけたいほどくやしかった。そして日本軍の射撃がいかに正確か、その恐しさを悟ったのもその時でした」と回想していた。

(二) 敵と間違えて砲撃

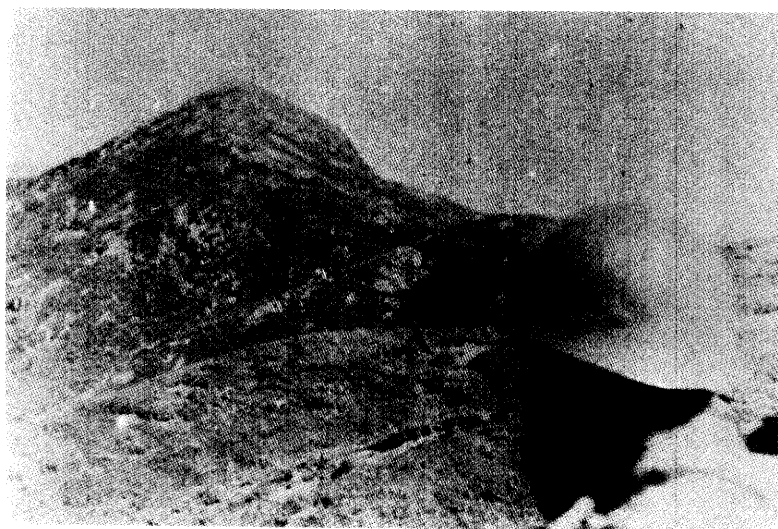
——逃げまどう奈良38連隊——

連隊主力が紫金山第一峰で激闘を展開しているころ、連隊長の指揮下をはなれ右側支隊に配属されていた第一大隊(渡辺綱彦少佐)の動きを一つ。

当時第一大隊副官代理だった津市西阿漕町岩田、宮木米吉さんの話。准尉で第一中隊第三小隊長だったが大隊副官が戦死したため、第三小隊長欠員とし、副官代理を命じられていた。

第一大隊は、奈良三十八連隊を主力とする右側支隊(支隊長、佐々木到一旅団長)の指揮下にはいつていた。十二日午前十時三十分、紫金山の右方、十字街西方の紅山(一〇三・五m)を占領した大隊は、逃げる敵を追って下関駅攻撃の準備をしていた。

大陸の空は晴れ上がり、左の紫金山は砲煙にかすんでいるようだった。このときである。ヒュヒュー、頭上にうなりを聞いたと思つたとたん、*「バリッ」*大隊の目の前で重砲の弾丸がサク裂した。



紫金山第一峰を望む

（敵襲か？）と思うまもなく、大隊を真中にはさんで前後（間隔は約三百ヤ）に砲弾の雨。（ウワー、同士打ちだー）上官も兵もなかった。準備中の野砲も機銃もおっぱり出してわれ勝ちに逃げ散る。宮木副官代理も渡辺大隊長に目もくれず一目散にりよう線に向かって逃げた。

四^キ後方に陣する友軍十^チ砲だ。普通、大隊の攻撃を援護する場合は砲兵隊の通信将校が大隊につき、電話連絡をとるが、このときは一大隊と無関係の砲兵隊だけに電話も通じなかった。第一大隊の兵たちも泥んこだから敵と間違えられたのもむりはない。五、六十発も撃ち込まれたろうか、十二、三分で砲撃は終わった。味方だと気付いたようだ。

宮木准尉はやっとの思いで身を起こした。はじめて異臭に気付く。両足は野ツボの中だった。みんな同じだ。右側の水田（乾田）に避難して、足跡ほどの穴を見つけては顔を伏せていた。あたりを見回したが、大隊長の姿が見えない。アワを食って探し回るうちに、いた、いた。

水たまりほどの小さな池に、虫をかみつぶしたような顔して一人しやがみ込んでいた。後ろで「バカやろう！」とどなる声。第一中隊長の田中嘉衛中尉（のち徐州会戦で戦死）だ。

「お前らは大切な兵器をおっぱり出して。見ろ、使いものにならんじゃないか！」と部下をしっかりとばしている。なるほど、兵器の損害は大きかった。この砲撃で馬が一頭死に、兵隊数人が負傷した。

渡辺大隊長は「うぬッ」と怒り、破裂した砲弾の弾尾を証拠品に持って、南京で開かれた部隊長会議の席上たたきつけた。味方を襲った砲兵、隊の名は伏せておこう。

宮木さんは華北の戦いでも味方の飛行機に爆撃された体験もあり、

「公報では戦死になっているが、味方の銃弾に死んだ人は多いですよ。戦争では避けられないできごとでしょうがね」としみじみノーマア戦争を語っている。

また、事変前に石原莞爾第十六師団長（故人）がいった「戦争は、暴力の無制限行使だ」ということが、胸の奥に突き刺ったまあいまでも残っており、「戦争は悲惨の一言に尽きる。この実感は体験したものでこそいえるのだ」――緒戦の東辛荘の戦いのあと、戦場掃除を命じられた。夕べまで「おい」「お前」と呼び合っていた戦友が、けさは腹ワタが飛び出し、ある者は頭をもぎ取られて死んでいるのだ。磨きに磨いた銃は泥の中だ。「くそッ」歯がみして敵を憎む――「戦友をやられた、この憎しみが戦場をますます悲惨に追い込んで行くですね」「おびただしい犠牲を出してやっと小山を占領しても、すぐ目の前は敵兵であふれている。だだっ広い大陸がどうなるものかと思った」としみじみ語っている。

宮木さんは下士官志願。十三年五月九日、奥福集の夜襲で負傷。これでめつきりからだをそこない、大

東亜戦争は内地勤務。末期に朝鮮・新義州の陸軍兵事部に出され（大尉）同地で終戦。

(二) 「連絡を絶やすな」

——通信班の活躍——

紫金山の戦闘で連隊通信班が活躍したことは、戦闘詳報に「ソノ功績偉大ナルモノアリ」と記録されており、概略はすでに述べたとおりである。

多気郡宮川村神竜、野呂清三さんは初年兵（一等兵）で連隊通信班第七有線班に属していた。通信班長は平井秋雄少尉だった。

十二月十日朝、下麒麟門（しもきりんもん）を出発した連隊本部は、中山門に通じる道路とは反対側の険しい道を前進（地図は第一峰攻略の項参照）。午前八時半ごろ黄家庄付近にいったん集結、野田連隊長は青馬東方高地に出て敵情地形を偵察した。連隊主力は付近の田んぼに展開、攻撃前進を開始した。通信班は連隊本部の中に含まれており、連隊長命で各大隊と連隊本部との通信連絡を保つことが任務である。野田連隊長は第二有線班（班長、樋口上等兵・津市出身）は右第一線の第二大隊、野呂一等兵所属の第七有線班（渡辺利通上等兵・松阪市出身）は左第一線の第三大隊へ、それぞれ通信線を張り、電話連絡をつきよと命令した。

第七有線班は渡辺班長以下、矢田主税上等兵（三重郡菰野町）、堀内福夫一等兵（一志郡一志町）、野呂一等兵、倉田勝一等兵（津市阿漕町）、宇佐美寿男上等兵（四日市市）という顔ぶれ。平井通信班長から命

令を受けた同班は、渡辺班長の号令で機材を持ち任務にとりかかった。

矢田上等兵は基地通信所開設のため第三大隊本部を追って、どんどん山へかけ登っていく。敵のチェコ式機銃の音は聞こえるが、今日はいつものようにピュンピュン飛んでこない。第三大隊副官に「本部より電話到着」と報告すると、終わりまで聞かず「よし、ついてこい」と、どんどん進んで行く。手をあげて班長と延線手の堀内一等兵（同年兵）に合図すると、堀内一等兵は年に似合わぬヒゲづらでにこっと笑い、線を延ばしながら走ってくる。

紫金山の山すそにかかると、敵は雑木を倒して障害物を作っている。踏み越えて進むことができない。困ったぞ、と思ったが、そこは山育ちの野呂一等兵。どこかに道はあると、倒木の根元の方ばかり選んだ。延線手は、肩に負う銃が邪魔になるらしく、班長と倉田一等兵が木をくぐっては線を受け取り、また渡しながら追ってくる。敵の逃げたトーチカがあった。その付近からは、倒木の障害はなくなったが、急に山は険しくなる。

こうして山の一角、大隊本部の位置に到着した。息つく間もなく稜線伝いに攻撃前進が開始された。



通信隊とともにある連隊本部の野田連隊長
(紫金山にて)

このとき、敵は南側の中山陵方向から山に火を放った。パチパチと草木は山頂へ燃え広がってくる。山火事に経験のある野呂一等兵は驚かなかつたが、電話線があぶない。「消せッ、消せッ」と班長がどなる。宇佐美上等兵、堀内、倉田両一等兵が線を反対側斜面へ引つ張つて火を避ける。間もなく火を消し止め、線は一、二カ所被覆を焼いた程度で通信には支障なかつた。第一線は敵と盛んに交戦中だ。連絡を絶やすな―と渡辺班長は副受話器にしがみついたまま。夕方になって、受話器をはずした班長の耳には受話器の跡が深く刻まれ、耳はひん曲つていたほどだった。

日没後、大隊本部とともに少し前進し、小松の間で夜を徹した。班長と堀内一等兵らは山を降り飯ごう炊さんした。野呂一等兵らは、それこそ一秒の休みもなく交代で受話器を守った。この夜、第六中隊の壮烈な夜襲が決行された。出征当時、同中隊第一小隊（横山孝三少尉）に属していた野呂一等兵は、同中隊の成功を祈りながら受話器を握りしめた。

こうして通信班は、めまぐるしく移動する連隊本部と第三大隊間にあつて、一刻も通信連絡を絶やすことなく任務をまっとう、紫金山攻略の大きなカゲの力となつたのであつた。

野呂さんは「紫金山最高峰を完全に占領し、紫のフサだけの軍旗のもと、野田連隊長の号令で東の方に向かい、ささげ銃をしたときの感激は生涯忘れられません」と結んでいる。

その後も連隊の全戦闘に参加。大東亜戦争は呉海軍施設部二二三設営部隊に入隊、南方に渡りボルネオで基地構築中、終戦。二十一年六月復員した。

第十七章 太平門占領

(一) 太平門に「日章旗」

——感無量で万歳を叫ぶ——

十二月十二日午後六時、連隊は紫金山を完全に占領した。夜半から、さしも頑強に抵抗した前面の敵は続々と退却を始めた。第一峰とあん部をへだてて相対する天文台高地にも、紫金山が落ちてもお抵抗できらう、独立した堅固な陣地を構築していたが抵抗する気配がなかった。これを察知した野田連隊長は、直ちに追撃前進命令を出した。先兵となった第六中隊（辻四五郎大尉、機関銃、工兵各一小隊配属）は、前方を警戒しながら前進したが、敵の抵抗はなく数人の投降者を捕えただけ。十三日午前七時半頃天文台高地を占領、午前九時十三分、太平門を占領した。秒まで覚えていたのですが、今は忘れましてと古山義規元上等兵は語ってくれた。

「前日の紫金山の夜襲の繰り返し、三度の総攻撃、突撃、よく生きていたものだと思います。隣の戦友江波の最後は今だに彷彿されます。悪戦苦闘とはあのことを言うのでしょうか。向うでもワァーと突撃している。こっちもワァーと突撃する。あっちの被害やこっちの被害、ゴチャゴチャになって分らんように

なっている。あのときのすさまじさは何とも言えなかった。死んだ方がましだ、と何回思ったことか。

十一人の戦友の遺体は担架がないから天幕を切って包み、必ず迎えに来るからちよつと待つておれよと、言い残して大平門攻撃へ移った。戦が済んで、野田部隊辻隊の供養をしました。

天文台陣地から、いよいよ南京城攻撃戦。獲物が目前にあるのにしばらく前進中止。この待ち通しかつたこと。前日から食べていないから腹は減るし、食べるものはない。飲む水もない。早く突入させてくれんなあ、とわくわくしたというのが武者振るいというものだろうか。海賊タバコといいまして、残りのタバコが左のポケットに二本、右のポケットに一本、計三本ありまして、三人の戦友と一服吸ったうまさというものは忘れられません。

いよいよ前進。大平門に私が勝手に日の丸を挙げたわけではありません。私が日章旗を持っております



辻四五郎大尉

ことと、鉄砲を持っているわ、荷物があるわ、どうせ死ぬんだ、一番乗りして死ねば本望だと思い、手榴弾一個と日章旗を持ってよじ登りました。城壁の下では万歳、万歳。三唱も四唱もして喜んでくれている。城壁上には誰もいなかったのです。えらい威勢がいい奴だが、一人放って置いていいのかといわれていたそうです。

一番乗りをさせていただいたのは、小村四郎当時伍長、稲垣曹長のおかげです。

わが六中隊の全員が城門を開き、城頭にだれが作つて来たのか大日章旗を掲げ、故郷の日本へも聞こえよ、と叫んだ感激は忘れることの出来ないことです。ところがその時、八列縦隊を整え、隊長が馬に乗り、延々と続く堂々たる隊列で、敵が退却して来たのです。すわッと攻撃態勢、機銃を据えて構えました。日の丸も一旦下ろしまして、敵を迎撃しようとしたのですが、白旗を掲げて降伏して来ましたから事なきを得ましたが、わずか三、四十人の友軍で一撃されればひとたまりもなかったことで、実のところ身震いしました。

この退却部隊を大平門から入れませんでした。入城させれば城内はまだ日本軍が占領しておりませんし、光華門の占領はこの十三日の夕方ですから大変なことになります。これを下関方面に誘導したのですが、戦争というものはこんなこともあります。わが大隊長、連隊長の判断は誤りがなかったのです。

この降伏軍の後、三百人ぐらいの敗残兵が投降して来た。この軍隊が反抗したので騒ぎが大きくなり、封殺、同士打ちが行われ大変な被害が出たと思われます。このことが南京虐殺と宣伝されているのではなかったのでしょうか。



紫金山上で行われた辻中隊の慰霊祭

私たちは良民を虐殺するというのは絶対あり得なかった、と皆さんが強く主張されます。私たちは城門脇の所を見ておりますし、大平門の城門を閉めて一人も退却部隊は入れておりませんから、虐殺が行われるわけがありません。戦争ですから反抗して来た部隊には攻撃しました。それでないと私たちが虐殺されますから。友軍がずいぶん惨殺されたのも見ております。戦争はなんとしてもやってはならない。人間を狂人にしてしまいます。狂気の術ですから。」

(二) 砲身に「辻隊占領」

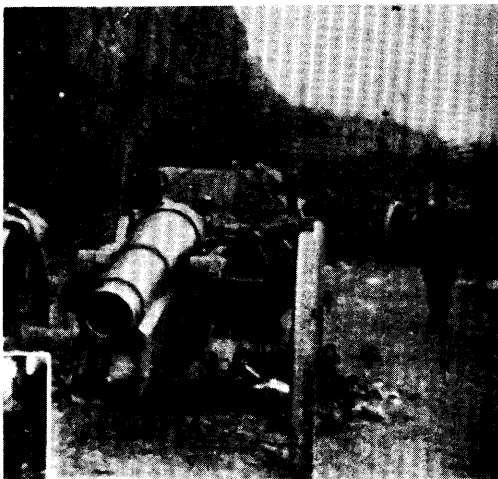
——敵の中佐先頭、陣地を突破——

第六中隊長だった辻四五郎さん〓五十六年没、四日市市前田町〓は、生前「十日の夜襲で、私は半数の部下を失った。その気持ちを察してくれた野田連隊長が私を呼び『辻、いいエサ（死に場所）をやろう』と大平門攻撃を命じられた。もちろん喜んで私は承知しました」―辻大尉は、すぐ配属の工兵小隊の永峰広信少尉を呼び「銃も背のうもいらぬ。敵はわれわれが引き受けた。とにかく持てるだけ爆薬を背負ってくれ」と頼み、一番乗りの城門にあげる日の丸を準備させた。出発した六中隊は第一峰と天文台高地の鞍部（あんぶ）で、両手を上げてぞろぞろと現われた五、六人の中国兵を捕えた。その中に、図のう（地図入れ）を下げたのがある。調べてみると書類や紫金山一帯の精密な地図が出てきた。問いただしていくうち、その男はふっとつられて日本語を口ばしり（しまったッ）と両手で口をふさいだ。あとのまつりだ。「こいつ日本語を知っているぞ」と追及すると中国軍官学校教導総隊の築城教官で、日本の陸軍士官学校

工兵科の出身である王（ワン）工兵中佐であることがわかった。紫金山一帯の陣地設計も自分がやったと、これを誇らし気にいう。そして観念したか「日本軍二協力スルカラ、腕ニ赤丸ノシルシ（連隊の標識である梅干部隊の威名は後述する）ツケテホシイ」という。赤丸をつけてやると先頭に立つて歩き出した。天文台までの軍用路は至る所に地雷が埋められていたが、王中佐の道案内で一兵の損傷もなく天文台陣地に進出、敵の抵抗もなかった。

このころ、友軍重砲が天文台高地を猛撃して来る。古山正雄一等兵（阿山郡出身）が「私が合図してきます」とかけ出して行った。まもなく、天文台近くの小山に姿を見せ、小銃に結びつけた日の丸を大きく振った。攻撃前進が急速を極めたもので、歩砲の協定線以上へ早期に歩兵が進出するということが起こり、同士打ちではなく、友軍の砲にたたかれるということがしばしば起こり悩んだことも戦争の一つである。こうして古山一等兵の勇敢な行動により、砲兵観測班が六中隊の進出を確認してくれたのである。

中隊は直ちに天文台から大平門に通じる自動車道に出た。この坂を下れば大平門だが、道は天文台山地の山腹を稲妻型にぬっている。曲りかどの要所要所には、中国軍主



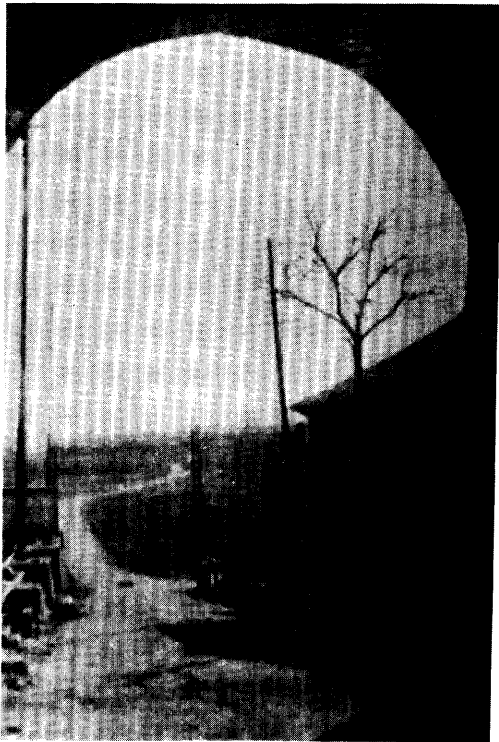
大平門で占領した十五センチ榴弾砲

力の撤退を援護するためのチェコ銃座が銃口を光らせていたが、中隊の先頭に立った王中佐が「撃つな、撃つな」と大声で叫んで手を振る。制止する相手が味方の中佐殿とあつては、ぼかんとする。そのスキにすかさず飛び込んで敵を捕える。こうして四カ所の陣地を難なく突破、高地を下りた。かすかに見えるのは南京城の一角、大平門である。「俺たちはここを占領するために悪戦苦闘して来たのだ。」目指す大平門、敵の首都南京城占領。

勇躍というか浮き足立つというか、我こそは一番乗りと気構えるが、敵の大部隊がなだれ込むように右往左往。部隊の構成はないが、烏合の衆であるから何が起こるかわからない。

これを攻撃するのに友軍は少な過ぎる。夜であればそのまま突込んだだろうが、そんな無謀は出来ないので前進を止めた。攻撃前進の姿勢、態勢であるが、敵も抵抗して来ない。にらみつけたままという態勢しばしであった。

道路は山すそで、紫金山ろくと明孝陵からの軍用路と一本になる。中隊がその三差路に差しかかると、砲を引つ



大平門より軍官学校付近を望む

張つて山から降りてきた中国軍砲兵とぶつかった。どぎもを抜かれた中国兵たちは砲をほっぽり出して馬に飛び乗り一目散。馬にありつかなかつた者は両手をあげて投降する。分取つたのは十五^テ榴弾砲。紫金山の山かげに陣地をしいて友軍を痛めつけていた砲だ。その場で畦地孝一伍長（故畦地尾鷲市長の長男、徐州会戦中迫撃砲の直撃で戦死）が銃剣で、砲身に「辻隊占領」と刻み込んだ。この砲は記念品として持ち帰り、神宮徴古館に陳列してあったが、戦後駐留軍の指示により撤去された。

こうして、めざす大平門は招呼の間になって来た。城壁沿いに右へ千^リたらず、中隊全員勇躍した指揮班を先頭に敵隊列を押しのかけてもぐり込み、あつという間に城門に突入したのである。

(三) 一番乗りに感慨無量

——即席の大日章旗が翻る——

「南京城一番乗りは、わが中隊であつた。今さら一番乗りうんぬんを言うわけでないが、この事実だけは書き残して置きたい、この真実を知つて戴きたいので踏み切りました。」と当時を語るのは、古山義規さん（当時第二大隊第六中隊第二小队一等兵）である。

中隊は十日未明をもつて第二峰（三八二・五高地）を攻撃。この南京最後の陣地に連隊は二日間の激戦を繰り広げたのであつた。わが中隊の正面は、敵精鋭中の精鋭を自他共に許す教導総隊である。この反撃により我中隊（辻四五郎大尉）は六十二名の戦死傷者を出し戦力も半減した。残る五十四名と重機関銃分隊、工兵一個分隊の配属を受けて、十三日早朝天明と共に一気に天文台陣地を経て、大平門に殺到した

のである。(その詳細は前述の通り)

連隊の先陣を承って午前九時十三分大平門城頭に高々と日章旗を掲げ、「我等南京城一番乗り」と中隊は声高々と万歳を唱えた。この感激の声、祖国に響けーと叫んだ。あの感激は忘れることが出来ない。一同東天を拝し、「われら、敵首都を占領せり」と中隊長の祖国に対しての報告の声に皆抱き合つてむせび泣いた。大平門は南京城の東側に面し、その朝は私たちの部隊以外友軍の進出はない。突出したのだ。前面は下関まで夥(おびただ)しい敵の人群。無数の敗残兵がうごめいている。この紫金山麓下の敵軍枢要部に通ずる門は、右側に見上げる山並、左側は玄武湖が遠々と延び、揚子江が白く東に一線を引いたようであった。この城門頭上に、日章旗を高々と翻した。城壁は、南京全市を囲いめぐっている壮大なものである。その延々たる城壁上に、わが中隊の日章旗がへんぽんと翻っている。名実ともに南京城一番乗りである。



古山義規さん

西方面の城壁付近で、パンパン、ドドドドと銃声が聞こえて来る。われわれも大平門城壁によじ登ったとき、城壁づたいに中国兵が七、八人必死に抵抗しながら玄武湖方面に逃げ去ろうとしている姿を発見した。いち早く銃を構え、応戦姿勢をとったとき、中隊長の「射つな!この場は見逃がしてやれ」という大声で銃をおろしたことがあったが、各城壁とも敵の敗残兵がウヨウヨしていた。

一方は山に囲まれ見通しの悪い地形で、この大きな城壁

上の日章旗も小さく見えた。(注・南京城の城門は実に大きなもので、大阪城の何倍かある。)

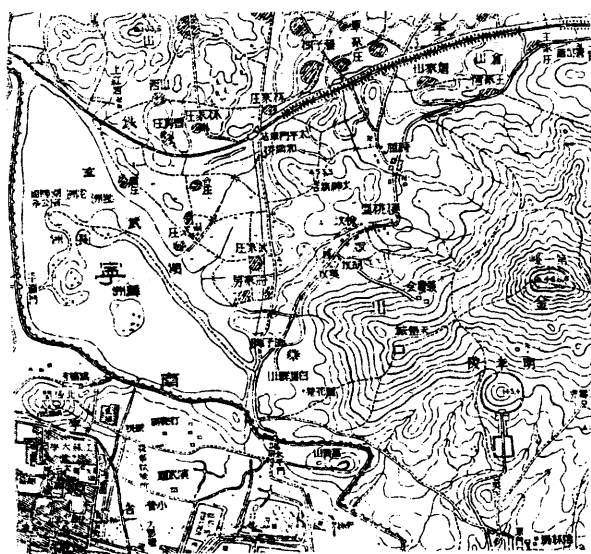
城内側にちように服地や色々な生地のはいつた敵軍の被服倉庫があり、城壁下から大きな声で「中隊長殿、被服庫があります」と、誰となく声を張り上げると中隊長が「この中に縫工兵はおらんか」と問いかける。とつさに「はい」と名乗り出たのが同年兵の尾崎君だった。

中隊長は嬉しげに、「ようし、四疊半大の大日章旗を作れ」と製作命令を出す。

その間、城壁上ではじれる思いで、日の丸の出来るのを待ちこがれる。早くしないと、他の城門に日の丸があがる、という気づかいである。

一方、どこかに挙がりはせぬか、と眼鏡で四方を見守っている。

二、三十分も経っただろうか。下から「中隊長殿、出来ました」と報告して持ち上げた。ようし、早く早く、と気が気でない。出来上った日章旗は、さすがに見事な大きな日章旗であった。その瞬間、四方を見守っていた者が「前方に日の丸らしきものが見えます」と報告するが、小さくて見定めることができない。代



大平門付近の地図

わる代わる眼鏡を手にするが、よく見ないと肉眼ではとうてい見えない。が、どうやら日の丸らしい。脇坂部隊（鯖江三十六連隊第一大隊、すなわち伊藤大隊である。前述の郷土出身兵がここに五百八十名奮戦していた）の苦戦の光華門占領であつたろう。

占領九時十三分より三十分遅れた時刻だったが、大平門城頭に大日章旗を翻した。これこそ南京城にふさわしい大きな日の丸の旗だった。あのときの一同の満足顔が今も目に浮かぶ。「脇坂部隊もびっくりしているぞ。」その日の夕刻になつても、この二本以外に日章旗は掲がることはなかった。

城門外には、そこかしこに敗残兵の死骸の山。バリバリと銃声、機銃の音がすれば、死体が何十何百と増えて行く。凄惨！これが戦場である。

こうして夜に入り八時すぎ、敗残兵の死骸整理中、突然三発の手榴弾に見舞われて、六名の死傷者が出た。その一人が私で、明けて十四日早朝、城内飛行場に開設された野戦病院に入院した。

(四) 一番乗りの古山一等兵を

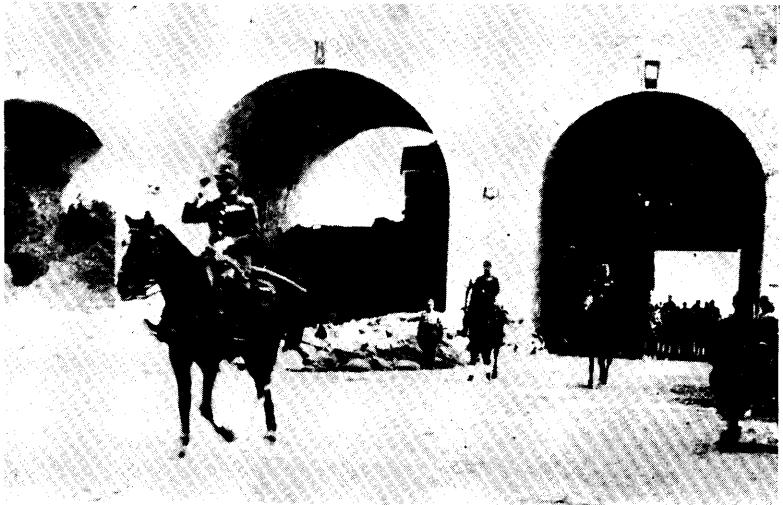
—— 朝香宮殿下がお言葉 ——

昭和十二年十二月十七日、南京入城式典後の二十二、三日頃、突然午後に出病院視察のため、上海から軍司令官朝香中将宮殿下がお越しになられるという知らせがあり、一同不敬のなきよう十分注意せよ、とのことであつた。

午後一時ちょうど、爆音と共に病院が開設されている城内飛行場に到着されたので、ますます緊張した

のである。飛行場で、お出迎えの将官六、七名、おそらく師団長クラスであろう。静かな威厳のあるお迎えである。降り立たれたのは、殿下、松井石根大将（上海方面軍司令官）、高級参謀の「モール」付の少将の三閣下であった。停止の様子もなく、早々と中山路を通過、姿が消える。間もなく、病院の二階にコッ、コッ、と足音がする。病室の前で足音が突然止まり、「こちらでございます」との声がするなり病院長の先導で、殿下、松井大将、参謀の順にはいつてこられ、狭い臨時の病室が金ピカに輝いていたようである。

何事が起こったのであろうか。何か悪いことでもしたのではなかったか。気がつかなかったが、えらいことになった、と穴があつたらはいって行きたい気持ちとはこんな時のことをいうのであろうか。三人並んでいた中間の寝台にいた私の前に殿下の姿が現われ、病傷日誌を横の病院長が取り上げ、殿下に渡した。目を通し、殿下自ら日誌を寝台の元の場に置かれ、「あなたが古山だね。こ



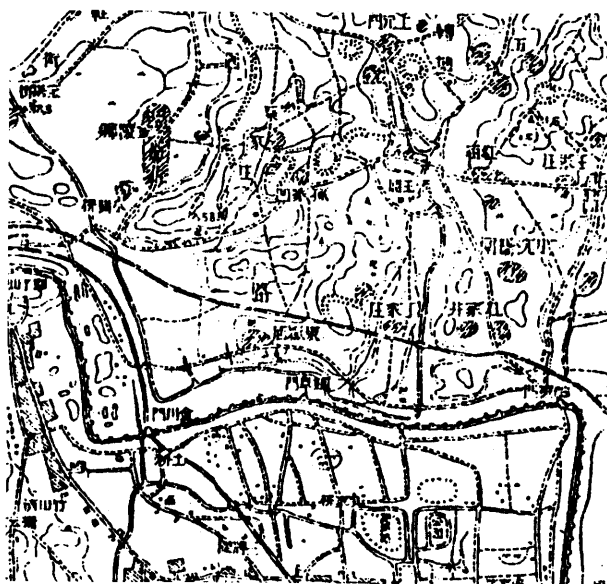
中山門へ入城する松井総司令官と朝香中将宮殿下

の度はご苦労でした。十分養生して、早くよくなつて中隊に復帰して下さい」とのお言葉のあと、私の前に手を差し延べられたが、とまどつて、手が震えて、とても差し出せない。左側の松井大將が顎をしゃくり、ほほ笑みを浮かべ、握手しなさい、とばかり合図下さつた。思い切つて右手を差し出すと、ほほ笑みを浮かべられた殿下の手はやわらかかつた。そして、あたたかであつた。殿下のお顔は拝する余裕はなかつたが、おやさしい方である、という印象が今も残る。こうして私だけに握手を下されて、参謀が先導になり部屋を出られる足音の消えるとすぐ、中山路に消え、機上の人となられて上海方面に爆音が消えて行つた。あつという間の出来事である。

私も驚いたが、同室の戦友も緊張そのもの。「おい、古山。病院視察どころか、お前の見舞いにおいで下さつたのだ。お前、一体何者だ。何をしたのだ」

病院長閣下も、主事医の軍医も大変驚かれていた様子、野戦病院としては初めてのことだし、当病院としては大変名誉なことだ、と喜んでおられたそうである。

おそらく、表向きは視察で、秘密のお見舞いだつ



下関付近の地図

たのだ。見舞いにしても、一兵卒にしては、上海、中支兩派遣軍司令官、しかも宮殿下のお見舞いは破格で、驚くのも無理のないこと。翌日、軍司令官の朝香宮殿下より、酒、たばこ、包帯の三品が下賜された。明けて昭和十三年一月五日、当病院を退院、中隊に復帰。

一月十日軍司令官宮殿下が紫金山の戦場御視察のため、中隊は殿下を昔の道中駕籠（かご）のようなものを作り、山上にご案内申し上げ、この護衛に任じた。三八二・五高地、激戦が行われた第二峰奪取の夜襲の実情報告は、各師団長、団体長、報道班員等多数出席の中で、立て板に水のように中隊長は講演をし、兵はひとつひとつの実演を行った。

この講演と実演は迫真のものがあり、宮殿下はじめ参観の諸星も驚いておられた。

私の宮殿下直接のお見舞いは、大平門の占領、日章旗掲揚が殿下の眼鏡に映ったのではないだろうか。



小林史郎さん

この日の丸掲揚一番乗りは、中隊指揮班の小林史郎軍曹や、宮崎清、片岡新之丞ら多くの戦友や先輩のたまもので、私一人の功績ではありません。特に、江波邦夫、彼の最後は壮烈というか、残酷というか今でも脳裏に彷彿として浮かんでくる。

第十八章 南京占領

(一) 敵も味方も下関へ

——南京城落とし日章旗輝く——

南京の総攻撃は、紫金山を占領した十二日を境として、その戦況はわが軍に有利に展開されて行つた。光華門に死闘を繰り返した鯖江第三十六連隊（金沢九師団所属）は、同日朝ついに城内に突入し、十二日正午には百十四師団長谷川部長が中華門に殺到。これを破り十三日早朝、大平門はわが三十三連隊第二大隊六中隊により確保され、おかれて午後三時には大野部隊（福知山）、片桐部隊（京都九連隊）の両部隊の一部が中山陵および中山門を奪取。正午前に第一大隊が配属されていた紫金山右側江岸を進撃して助川部隊（奈良三十八連隊）の手で和平門に日章旗がひるがえった。わが郷土部隊三十三連隊が、敵の咽喉元紫金山を占領したことによって開かれたものである。

ここに至つて、南京防衛の中国軍は総くずれとなつた。東、西、南の三方から突入したわが軍と防衛軍との間に、激しい市街戦が展開されて来たのである。追い詰められた敵は大混乱を起こし、ただ一つの退路、下関（シャーカーン）めざしなだれをうって逃げて行く。戦鬪というより、もう一方的なセン滅戦だつ

た。下関は、揚子江をはさんだ浦口（ほこう）とを結ぶ連絡船の発着場。日本の下関（しものせき）―門司間みたいな所であった。揚子江の水は、このところでも潮の干満が甚だしく、水深が二十呎から三十呎もあり、水が渦を巻いて流れて行くから、揚子江に落ちたら命は助からぬものと覚悟している、と聞かされていたところでもある。

連隊主力は十三日午前九時三十分「一七師作戦甲第一七一号」によって「下関方面に前進し、敵の退路を遮断せよ」と命じられた。師団直轄となった第六中隊を大平門の守備に残した主力は同十時三十分、第二大隊（二中隊欠）を前衛として出発。大平門―和平門―下関道を下関方面に前進、途中、道路両側の敵陣を掃討しながら午後二時三十分、前衛の先頭は下関に達した。一方同日午前十時三十分、紅山を占領した第一大隊は独断で下関向け進撃、午後一時過ぎ主力より一足先に下関に到着していた。

揚子江上には数千の敵敗残兵が機帆船、小舟、イカダをはじめ丸太、戸板など手当たりしだいの浮よう物を利用して、対岸へ退却中である。前進する道路の両側は、敵敗残兵が道を開けて見送っている。その数も無数である。出征のとき郷土の人々が見送ってくれた「格好」である。無抵抗の敵兵を撃つバカはない。よほど狂った者か、恨みのある者以外は手を出す者はいない。敵も味方も入り乱れて、下関へ、下関へと前進する姿は奇妙な姿であった。これも戦争である。

連隊は右側支隊長と連絡をとり、その指揮下にはいり、同日夕、南京城を完全に占領した。時に江南の空は澄み、城頭の日章旗は夕映えに輝いた。

一等兵で第一機関銃指揮班にいた志摩郡浜島町の西飯栄さんは次のような思い出を寄せている。

私たち第一線の将兵は、九日に出した投降勧告に対し、敵が白旗を出してくれることをどれほど心待ちしたものか。紫金山のふもと下五旗に砲列をしいた友軍の重野砲は十一日一斉に火を吹いた。一時は、砲弾のサク裂で紫金山頂が見えなくなったほどだった。わが大隊の予備隊なので、山ろくでこれを見ながら待機していた。そこへ敵重迫撃砲弾が落下、第三小隊は小隊長以下三人を残し二十人が戦死した。平城慶二郎分隊長（一志郡）もこのとき戦死した。十三日、第一大隊は下関へ追撃に出た。途中の道路はいたる所に地雷が埋めてあったが、工兵隊が地雷探知器によって危険標識を立ててくれていた。しかし、指揮班の荷物を積んでいた牛が地雷を踏み、たづなを取っていた中国人もろとも吹っ飛ばされ、われわれはその日一日中食物にありつけなかった。下関の掃討中、日本の駆逐艦が揚子江をさかのぼってきた。輝く軍艦旗、日の丸、海から陸からバンザイのうづがまき起こった。このときの感激は忘れられない。

西飯さんは十八年三月召集され、再び久居に入隊、第七三七三〇部隊（歩五一）から歩兵第六十連隊に転属、ビルマに転進、インパール作戦に参加、二十一年六月復員。曹長。第一機関銃中隊の人々で「戦友会」を結成、毎年一回親睦会を開いている。

（二） 守り堅固な把江門

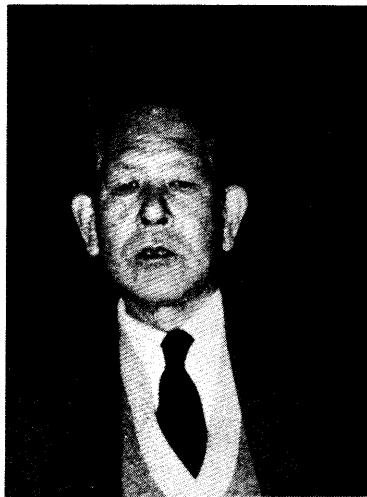
——敵の敗残兵使い城門開く——

十二月十一日午前三時、紫金山攻撃中の連隊を離れ、奈良三十八連隊を主力とする右側支隊（支隊長佐々木到一旅団長）の指揮下にはいった第一大隊は、支隊の右第一線となって玄武湖北側地区を揚子江めざし

て進撃した。十二日夜、連隊主力の攻撃は燃える紫金山を左にながめ紅山近くに進出し、第一大隊は翌十三日和平門を占領した。

この付近一帯は紫金山を追われた敗残兵や、中央門から流れ出した敵兵、鎮江方面から退却して来た敵兵がウヨウヨしている。なかには夜間はもちろん昼間でも日本軍の中へまぎれ込んで来るものもある。要領のよい兵隊は、敵兵に装具から背のうを背負わせて鉄砲だけ肩にし、敵を指揮している。最も悪い奴は、装具や背のうはもちろん鉄砲まで敵にかつがせている。「お前、敵がずどんと来たらどうする」「いや、もう大丈夫。どうもしやしないよ。反抗する元氣もないよ」と竹の鞭一本持つて歩いている兵隊もいる。

你（ニー）、快快的（カイカイデ）片言の支那語である。お互いに顔を合わせるとみんな善人である。あの激しい前日までの戦闘はどこであったかという風景。



北川藤正さん

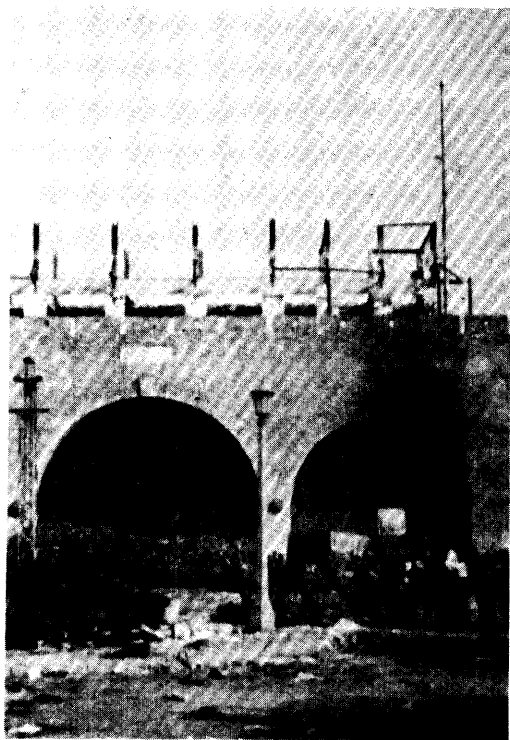
この紅山と幕府山、獅子山砲台を結ぶ原野は、黒ゴマをまいたように中国兵でうずまっている。この状況をみた大隊長渡辺綱彦少佐は、独断で下関への追撃を命令した。その尖兵中隊が、田中嘉衛大尉（鈴鹿市池田町出身）の指揮する第一中隊である。物々しく要塞化され、全山鉄壁の獅子山要塞からも何ら抵抗はない。下関に敵軍を制圧して、把江門に殺到した。堅固な名にしよう壮大的把江門は土のうで堅く閉ざされて水ももらさぬ構えである。爆破して開

門としては双方に被害が出る。戦は終わっているのであるから事故も気づかわれるので、裏側へ回って土のう除きから始まった。表からは、歩兵の持っている円匙と十字鍬であるからはかどらないが、やむを得ない。「敗残兵を使うことにしたら」と意見具申して「おい」と呼び集めたところ、何百人という敗残兵が大喜びで集まって来た。使い出したら敗残兵の労働力は大変なもので、作業がはかどった。

城門を開いて把江門から入城したが、至る所黒煙がもうもうとしている。敵の焼土作戦である。敗残兵がつぎつぎ出て来る。抵抗する奴は撃ったが、逃げる者は撃つなという中隊長の厳命を守り、中山北路を南下して行くのを見のがす。

敵七十八師、八十八師、南京防衛総司令官唐生智中将の精鋭、中国軍が虎の子部隊と秘蔵していた最強部隊の兵営を占領する。中国軍蒋介石政府の本拠地南京である。高樓の林立する中を、どんどん南下して行った。

鼓樓を過ぎ、ロータリーの中山南路、東路、西路の交差点付近で南から突入して来た鯖江三十六連隊脇坂部隊と鉢合わせした。「えらかったのう」「光華



占領直後の把江門

門は」「紫金山は」と慰め合うのもつかの間、ここは戦陣。中華門も占領して、ここから百十四師団が突入して来る。

私たちの中隊を先頭にした大隊はここから左に折れ、中山東路を中山門に前進したが、ここは既にわが師団の福知山二十連隊、京都九連隊が占領していた。ロータリーの交差点に立ったときはこのことを知らず、戦闘準備おさおさおこたりにく緊張の眼光を輝かせて、全身全霊火の玉となって歩一歩前進したのである。

中山門に近づくに従い、どこもかしこも友軍で充満している。一体こんなに大勢の軍隊がどこにいたのだろう。中山門をはいって右側の南京市政府へ行ったら、既に連隊本部がこちらに來ている。師団司令部もこちらに來ている。紫金山がかすんで見える。あの山で、あの激戦のとき、地団駄踏んだ、もう一人い



故 田中嘉衛さん

てくれたら、もう一人いてくれたらあれを殺しはしないで済んだのに。あのときの戦友が如何に頼り甲斐のあるものであったことか。ここで俺たちが引いては全滅だ、よし行くぞ、と先頭に立ったのは二人か三人であったのにと思ひだし、今この友軍の大群集を見て力強いやら、気拔けするやら。こうして中隊は南京市政府庁舎前に集結し、南京城は完全にわが軍により占領せり」と中隊長の発声により万歳を高らかに唱え、郷土三重に報告、又銃したのである。

以上は第一中隊指揮班の北川藤正軍曹（当時）の回想である。鈴鹿市下大久保に健在。

（三）城内は荒れ放題

——住民 城壁に布垂らし脱出——

南京を攻略した郷土部隊は、十四日朝から命により南京城内外の敗残兵掃討を行った。

南京を守っていた中国蔣介石軍は約六万。攻防戦で死んだものや揚子江を渡って逃げきったもの、漢西門や水西門から城西へ逃げたものも多数あったが、それでも周辺には敗残兵がうようよししていた。

高さ二十餘余の南京城壁から、黒や赤、緑、白と色とりどりの布切れが何百何千と垂れ下がっている。実に見事なものであった。伏見のお稲荷さんの祭典どころの騒ぎではない。十三日、把江門へ殺到して、この風景を見、驚いたものであった。城門はとぎされているから、住民が脱出するための知恵だったとわかり、「可哀相なことをしたものだ」と感無量のものでありました。奈良三十八連隊を主力、そして左側支隊（支隊長佐々木到一少将）の指揮下にはいつていた第三十三連隊の第一大隊の第一中隊は、既報のごとく尖兵中隊であつたので、私たちが把江門へ突入したときは、あの布切れからまだどんな人が脱出しているのが見えました」と北川藤正軍曹や中西准尉、野呂征久大尉は当時を語っている。

城内掃討にはいつて見ると城内は、日本軍の砲爆撃をうけてくずれた家屋や、倒れた電柱などが道路上に散乱し、電気、水道はもちろん止まり、砲爆撃を受けなかった家屋も無残に荒らされ放題。人影も全くない。廃虚さながらの悲惨な状況だった。これは敵が退却に際し、故意に破壊し、放火し、使用の出来な

いようにしたことも手伝ったことと、火事場泥棒意識で、こうした際に一儲けしようと、かけずり回って泥棒をするという輩がその当時の中国では多かったせいである。後で知らされたことだが、戦火の被害よりこの人たちの放火略奪の被害が南京戦の損害を大きくしたそうである。

こうして、憲兵の監視下の民家にはいると住民や敗残兵が隠れている。敵兵は民家に飛び込んで軍服を脱ぎ、良民に早変わりしたが服が足りず、上着だけやズボンだけの者もいる。民服を着ている連中もいる。曲りくねった中国の民家で搜索は困難であったが、こっちもこわごわである。それでも七、八百人は捕虜にした。

一方、城外の紫金山麓や下関周辺を掃討していた一、三大隊の方も、山や部落を搜索するのだが、抵抗の氣力を失った敗残兵は五人、十人とかたまって白旗を掲げてぞろぞろと投降してくる。よくもこれだけ隠れていたものだと感心するやら安心するやら、その数五、六千人にも達した程である。

「当時、南京で日本軍に捕えられた捕虜は数万人に達したといわれるが、



下宮殿中将香朝官司令総



空陸より入場

この捕虜が虐殺に連なったのかともいわれるが、私はすべてを否定はしない。極めて一部であろう。しかし、良民を虐殺したということは、あり得ないと証言したい。軍人が戦火の中でならば、敵を殺傷することは当たり前であるが、戦いが終わって笑いの聞こえる中で殺人は出来ない。それをやったという人は狂人である、と私は断定する。幾度か砲火の中をくぐり抜けて来た、また南京城の城頭にも立った偽らざる告白である」

南京には、中国軍の物資が豊富に集積されていた。これらは兵士たちが荒らさないように師団や軍ですばやく差し押え万全を期した。

(四) 銃殺直前の少年救う

——倉田
一等兵 盛大な慰霊祭に感銘——

こうした殺伐たるなかにも美談はあった。津市雲出島貫町で石油店を経営されていた倉田明さん（現在は息子の正明さんが社長）は、紫金山の戦闘で足をくじいたの

で分隊の留守番役に回った。任務を終えて空腹に耐える戦友たちの夕食のしたくをしようと苦力（クーリ）の李少年（十七、八歳）を連れて下関の町へ野菜の買物に出かけた途中、現地民の人だからするのでのぞいて見ると、七、八人の日本兵がひとりの少年をとりまき、いまにも銃殺しようとしている。兵のひとりが少年の胸にびたりと銃口をつきつけて、引き金をしばらくとしている。これを見た倉田一等兵は「待てッ」と叫んで人垣を分けた。

「罪のない者を殺（や）るなッ」と銃の前に両手をひろげて立ちふさがった。

「どけッ貴様ッ」

「いや、どかぬ。少年をやるならおれといっしよにやれ」

少年は倉田一等兵の広く厚い背に隠れる。

これを見ていた五十歳前後の立派な中国人が、

「どうか助けてやって下さい」

と両手を合わせる。

「おお、フーチン（父親）か」

「違いますか、かわいそうです」

この男が父親でなくても、もちろん少年を助けるつもりだ。

「どうだ。おれも撃つてくれ」

倉田一等兵は真剣な口調。

「いや、貴様を撃つことは出来ん」

「じゃ、おれに免じてこの少年を放してやれ、子供一人をやったところで、かわいそうなだけじゃないか」

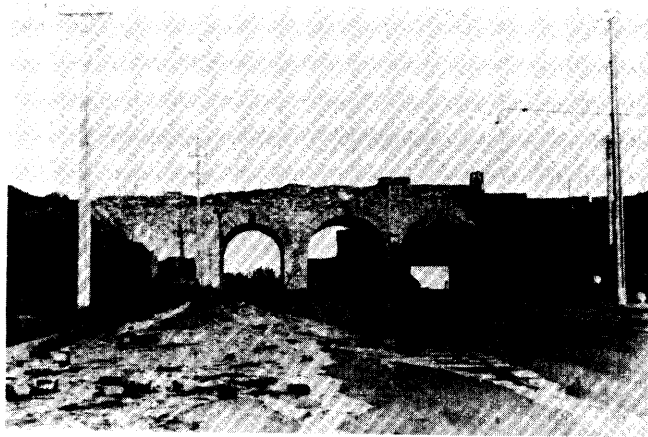
しばらくやりとりがあつて、やっと少年の命を救つてやる事ができた。

少年は籠（コン）という名で十五歳、幼年学校の生徒だった。華北へ移動するまでの約一カ月間二人の少年を苦力として使ったが、学生義勇軍という李少年（北京生まれ）は、倉田一等兵の行為に感激し、

「貴長官は心から東亜民族を愛する人だ。われわれは武力で圧迫されるより、情で迎えられた方が日本に協調できると目を輝かせた。」

非戦闘員を温かくいたわる倉田さんも、いざ敵兵と対すれば豪胆な勇士であつた。退却する友軍の援護をたったひとりで引き受け、猛攻して来る敵軍を重機でナギ倒し、撃退したという奮戦記は戦友の語り草になっている。

「当時、長男の正明（現社長）が妻のおなかにあり、私は



占領直後の中山門

無駄な殺生はしなくなつたのと、敵軍とはいえ、中国人（一般の）個人個人はみな紳士だ。憎悪や武力ではなく、中国の協調によってこそ東亜民族の繁栄をはかることができるという考えをもっていました」と、回想して語っていた。

わが郷土部隊が中国戦線に出動してからやがて四カ月。南京占領後、三十三連隊の属する第三十旅団長佐々木到一少将が南京警備司令官を命じられ、第一、二の両大隊は連隊主力とともに城内警備についたが、第三大隊は南京西方約三〇^キの地点にある江寧鎮（こうねいちん）の駐とん警備となつた。

連隊は南京市政府に本部をおき、城内の南側半分の警備を受けもつた。北側半分は奈良三十八連隊である。住民は金陵学園を中心として設けられた難民区にはいつていたが、敗残兵でないことがわかると「良民証」を交付して順次帰宅させた。

入場式は空陸海より盛大に行われ、「よくぞ日本に生まれけり」と感激を覚えたのであつたが、その時、堵列部隊の戦友の肩に懸けられた戦友の霊をまだ慰霊してない。この盛儀に参列したことによって瞑すべきか、とも考えていたが、心残りであつたところへ命令が出て、十二月三十日慰霊祭を挙行するとの発表があり安堵した。

十二月三十日、全師団の慰霊祭が師団司令部前広場で盛大に、厳粛に挙行された。この式典は、未だかつて私たちが見聞いたことのない盛大なもので、以来の溜飲が一度にさがつた。

(五)

「万歳の声、響く」

——中島中将の私用日記より——

特別な配慮により当時の第十六師団長中島今朝吾中将の私用日記が拝借出来ることになり、その一部を掲載する。

写真のように大変難解な文字だが、これまた特別に解説して下さる人があり、引用上助かった。

全国民を挙げて敵首都占領という、その入城式の盛儀に「胸中予の肯うところに非ず」とされた將軍があつた。それは第十六師団長中島今朝吾中将である。

何故か？



中島今朝吾中将

「然るに幕僚間には異議ありたるものの如く、師団長は師団、將兵の名誉の為に先頭に立ちて中山門より正々堂々入城すべし、と意見ありたれば、是ももつものことなれば予はここに中山門より入城することに決せり」

十二月十五日、晴天にして暖。於中央飯店。

一、既に一部掃討隊は入城しありたるも、この日新たに入城式の形式をもって南京占領の一段落とする。

一、各隊は事後処理の任務遂行に差し支えなき範囲にお

いて、代表部隊を堵列せり。師団司令部、各部隊長陪従の上、午後一時三十分中山門より入城し、国民政府庁舎を師団司令部に充当しありたれば、同庁舎に入り、国旗を掲揚し、各部隊長及将校参列の上、大元帥陛下の万歳を三唱し、祝盃を開きたり。

その支那事变開戦以来、第十六師団司令部に従軍僧として、師団長の下に影となり日なたとなっていた一代の快僧がある。その和尚は、村上独譚老師という。本稿進展にともない、中島師団長及びこの村上独譚老師の「足跡を消え失せてはならじ」というこれまで未公開の記録を続々投稿、この郷土人物戦記の充実にご協力いただいている佐々木六郎氏「広島県広島市安佐北区可部町上原八九五」は、深く両氏を欽慕し、師団長日記と共にその逸話を提供下さっている。この貴重な記録を、追々と発表して行く。

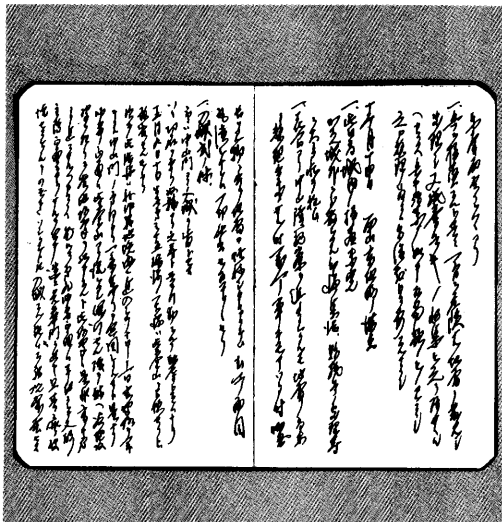
中島第十六師団長の賦

昭和丁丑年月日十二

敢て南京の攻略を期し鋭峰を進む。

紫金山の第一峰と西山と偕是れ国都防守の両眼目なり。

十一日・二〇（連隊）先ず西山を奪略す。
十二日・三三（連隊）第一峰を強取す。



中島今朝吾中将の私用日記

双眼既に瞑し敵復戦意亡ぶ。

黎明逃ぐるに尾し中山門に突入す。

国府の庁上高く日章旗を翻らす。

万歳の声、四百余州に響く。

天龍寺村上和尚の返賦

將軍中島閣下、大命を奉じ、第十六師団の將士を率い、昭和丁丑の秋九月初の五日、京師を發つ。功を朔北の野に奏し、鉾を江南の丘に転ず。

連日連夜、奮戦健闘し、百戦百勝す。

(六) 晴天の日に入城の式

——日章旗も旭光に映える——

金陵一百里の要関を攻略す。

臘月十三日は、我が邦の風習事始の吉日と称するなり。

恰かも是れ出師以来一百日の記念日に相当するなり。

黎明六朝の盛都敵国の首都南京を攻略す。

月望をトし入城の式を挙ぐ。

蓋し敵国の首都に入城するは前代未聞の盛事なり。

予は何ぞ幸なるか。

驥尾に附し、征軍に従い陣中に在り親しく曠古の盛典を参観す。

この日、天晴れ地朗かなり。

国旗翩翻として旭光に映ず。

軍容肅々として中山門より入る。

仰ぎて將軍馬上の英姿を見れば、

すなわち是れ山を抜き、世を蓋ふの雄なり。

直ちに國民政府に入り改めて第十六師團司令部と爲す。

三軍を統率し、もつて聖明広大の恩沢二応へ奉る。

嗚呼、盛んなるかな皇軍の威、嗚呼、大なるかな閣下の勲し。

予感激に充滿して辞無きを恨む。

將軍偶（たまたま）南京攻略の

所感一篇を示す。

仍りて玉韻に拳（たよ）り聊か

卑辞を聯ね將軍の壯図を詠ま

と欲す。

然りといえども意句共に到らざ



中島師團長の昭和十三年元旦の賦

るなり。

將軍幸に叱正を垂れよ。

伏して請う。

從軍僧

独潭上

中島今朝吾中将賦

命を奉じ師を出し正に百日なり。

河北江南銳峰を逞しうす。

將軍の士氣力山を抜く。

勇猛果敢耳目を驚かす。

六代險を誇る青龍山。

紫金の第一峰を奪取す。

赤魔紅も顔色無し。

威風堂々として城門を圧す。

楼上高く掲ぐ日章旗。

武勲千古神州に輝く。

未稿

堵列部隊中戦友が遺骨を首にかけ参列せるを目撃し、入城の盛事と戦没諸将士の忠烈とを想ひて馬上落

涙禁じ難し。

入城の式 勇ましく見つれども

髭ぬらす白骨の礼

深夜目覚めて再び陣没者を偲び枕のぬるるを見る

ねざめさめて見れば枕はぬれてけり

遺骨持つ友のすがたしのびつ

天龍寺村上和尚一日風邪にて床につく。

疊りても復甦るものと知りながら

一しほさびし旅空の床

毎朝国民政府司令部に出勤し、居室窓より紫金山第一峰を望み三三勇士の霊を偲ぶ。

紫金山第一峰の頂に

鬼とりひしぐ武夫ぞ住む

観る度にそそろ涙をさそひける

頂にねむる益良夫の霊

南京をまるのみにせる

若武者は

今第一峰の頂にねむる

(七) 915 柱の英霊慰める

——奮闘努力で武威を宣揚——

慰霊祭

一、師団の慰霊祭も年内に行わねばならぬ重要な行事の一つであるので、成るべく速に行うことにつとめたが、三八の連隊と遺骨運送のため全般に遅れて三十日に之を取り行うこととなる。「安堵せり」

二、この後中支作戦における戦没者の慰霊祭という意見もありたるが、それは少しく考えの足らぬものと信じ、出征以来の全英霊に対する行事とせり。

今度は三長官、府県知事の弔電代拝もありたるに、万一北支と中支とを区分したるならんには待遇上の不公平をきたすものにて、これを全般としたることは大に可なりと思えり。

三、式場には軍司令官朝香中将宮殿下も御臨席給う。

四、厳肅の上にも一大盛儀なりしは戦没将士への饒けならん。

祭文

ここに祭壇を設け師団出動以来北支及中支において、壮烈なる最後を遂げたる故陸軍歩兵大尉田代滝蔵君以下九百十四柱の英霊を迎えて慰霊の式を行う。

襄に北支を去りて将に中支に向つて転進せんとするに在り寧晋城頭において、諸士の霊を慰めると共にわれらは、諸士の忠勇義烈を亀鑑とし、諸士の上天の擁護に依りて奮闘努力、もつて皇国の武威を宣揚

せんことを誓えり。

次いで再び海を越えて揚子江岸白茆口に上陸し常熟に、無錫に、常州に、丹陽に将又句容に到る処、敵を駆逐し未だ三旬ならずして一躍国都南京に迫る。

昇天の英霊に在りて常にわれらを導きつつあるを信じて地上の戦友は、真に意気昂天の慨あり、天地相応して十三日南京を占領し、十五日師団の入城式を行い、国民政府を占拠して、楼上高く日章旗を掲げ、万歳の声四百余州を震駭し、ここに皇国の国威を宣揚して僅に大命に応え奉るを得たるは、真に壮烈というべきなり。

然り入城の式は真に壮烈なりき。去りながら在天の英霊を思い、また堵列部隊戦友の肩に捧げられて此盛儀に加わる諸士の姿を観るとき、感慨胸に迫り落涙の禁ずる能わざるものあり。

今、ここに改めて諸士の霊に敬謝す。此功績は、ことごとく是れ諸士の功也。また改めて諸士に誓う。われわれの強命遂行は、前途尚大に重きを加うるものあり。わ



朝香宮軍司令官閣下の御参拝

れら驚鈍に鞭うちて苟も諸士の令名を傷つけざるべし。願わくば、在天の英靈常にわれらを導きて、最終の目約に向つて進ましめよ。師団の戦力は、実に物的に諸士を失つて、心的には百千倍の増加を得たるものにして、われらは常に諸士と常住し、諸士と軍の行を偕にするものなりと信じて疑わざるものなり。英靈希わくは亨けよ。

中島今朝吾第十六師団長の、南京攻略戦における面目躍如たるものは、この慰霊祭後であつた。

日記に曰く、

「慰霊祭も滞りなく終わりました。偕て翌日遺骨奉安所に来たりて見れば、前日祭場に使用しありたる器物が旧に復しあらず。献花、献幕申すに及ばず、献饌（水）も献じてない」

師団長、号泣止まず。滂沱（ばうだ）として衛兵長召致した。

「この祭典担当将校全員をただちに集合させよ」と命令された。

おそらく大雷が落ち、声涙共に下る師団長の訓辞は如何ばかりであつたろうか。数十名の将校が眼を真っ赤にして退庁したが、ただちに厳肅な祭壇が蘇つた。

（八） 中島師団長の正月

——敵国の水で雑煮味わう——

中島第十六師団長の私用日記によると、懸案の慰霊祭も滞りなく終りやや安堵して、

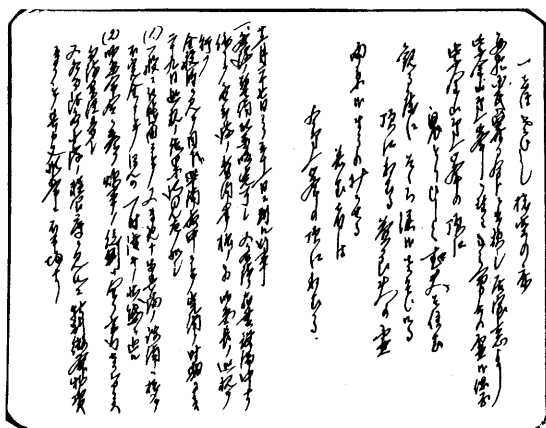
「予は三十一日、鳥打に出て鴨一羽、雉子一羽を獲りたれば、元日は鴨雑煮、二日は雉雑煮ということ

にして提供せり。晦日そばの事を考えたが、遂に発見せずしてこのことだけは成し遂げ得ず。

大晦日となれば、何となく今年の締くくりをせねばならぬ様に思いたれども、仲々一朝一夕では出来ぬ。手許の書類だけ応急的に片付けて、除夜の鐘を待つこととせり」とある。

続いて師団司令部の昭和十三年戊寅、正月元旦は誠に朗かな日である。

朝早く起き出て、昨夜ついた電灯の下で顔を洗い、旭光を拝して遙に聖寿の万歳を捧て後、皆が台所に



中島師団長の私用日記

て雑煮の支度をなしている準備の間に新年の所感ともいうものを跋句して書き見たのである。

一、勅題 神苑の朝

陣中に仰ぐ朝日にうつりける

戦勝いのる神苑のむれ

二、敵国正月の雑煮餅

敵国の水で雑煮の味をます

玄武湖の鴨を雑煮の味にそへ

蔣君のかまどにたる雑煮餅

味はやつぱり日本式なり

午後九時、皆一室に集まりて賀詞を交換したる後、同じ釜の雑煮餅を味わう。その面々は、宮下大尉、天龍寺村上

独潭和尚、黒谷、日崎和尚（現浄土宗黒谷本山派頭岑院住職、大本山知恩院の長老で正僧正）花岡勤舟、従軍画家高山剣士、映画の大浦、岡両君、当番兵三名、運転士、衛兵長西脇庄三少尉、四日市市在住、三重県冷凍業協同組合長、伊勢冷蔵製氷（株）取締役以下十名、外に迷子のポインター一匹とカナリヤ。午前十時師団司令部集合

遙拝式 国旗掲揚式

聖寿万歳三唱、次いで団体長以上と共に祝盃

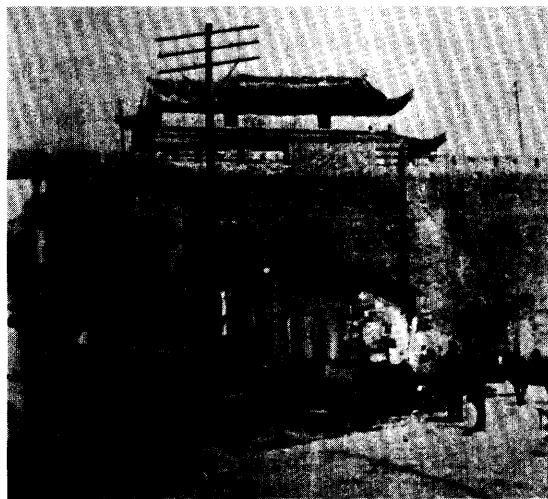
樽酒に一杯機嫌となり、正午前一旦帰宅し、午後二時より宮殿下の許に慶賀に参上す。

来り集まる将校等、宮様と共に一同年頭らしき光景の中に、元旦を祝して午後四時帰宅す。

この日は少しく気力増したのに、体力尚未だ十分恢復せぬので、酔った様な気持ちにて午後五時睡眠せり。

元日と同時に早朝より久しぶりに始まりたるは、敵の空襲なり。且また目標とする処は上海、杭州、蘇州、南京、共に飛行場のみにて他に及ばず。

このころ、南京市内三カ所支那人の放火あり。実につまらぬ家の火災なれども、注目すべきは、それは朝火事なる



激戦のあった中華門の正月

ことと、重要建築物の近火なることより判断して、何らか空襲と直接関係あるらしく思われたり。何となれば、支那軍より見たならば、今、日本の空軍を少し位壊したところで大局に影響はないが、それよりも、軍令部、殊に宮様を目的に空襲したるは、日本軍に与える士気に及ぼす影響の方を考えたるに相違ないと考える。元よりこの飛行機は露国製であり、操縦将校も恐らくは露国将校ならん。そして、日本の空軍が補充難に陥っていることは、彼等は百も承知のこと。今、日本空軍の実力は第一線に在る。これを少しでも破壊することは、日露戦争の発動を永久に喰い止めることになる。此度の空襲は、露国軍の日本軍攻撃にして、日露戦は正に開始せられたるものと見るべし。

後、上海にては飛行場のみならず軍艦をもねらいたり。これは、飛行機と共に軍艦を攻撃し、一挙兩得なるが故とみるべし。

一月二十七日、南京において海軍が二機、高射砲が一機撃墜したり。操縦士は皆露国将校なることが判明せり。

以上、出来得る限り日誌を忠実に復刻したので、やや読み難いところもあるが、ご了解を乞う。

(九) 郷土部隊、南京で正月

——しみじみと「さのさ節」——

昭和十三年一月一日、郷土部隊の兵隊は、敵の首都南京で正月を迎えた。快晴の天候に恵まれ、各中隊ごとにはるか故国の方向を拝したのち、正月料理に舌つづみをうった。

戦地にあっても勝ち戦は有難いもので、揚子江を遡江してくる連絡船から、つぎつぎと物資が揚陸されて、カン詰の赤飯や雑煮、冷凍した魚、カズノコ、かち栗、酒などの正月用品が豊富に配給される。

また兵隊は器用なもので、荒ナワを再生してしめ縄を作ったり、豆腐屋のウスを徴発してもちをついたりしている。

町の治安も日を追って回復し、軍についてきた商人たちが、上海からトラックで酒や菓子、食料品などを運んで売り始めている。一般の商店はまだ開かれていないが、裏口にて営業している。軍票で三カ月分も一度に給料や手当をもらった兵士たちは、使うところがないので、これらの品物を争って買い故郷へも送った。この足もとにつけこんだ中国人を含む商人たちは、市価の三倍も五倍もの高値で売りつけ、暴利をむさぼる者が多かったことも印象に残る。特に中国人の抜け目のなさや中国人が珍しかったことも手伝って、そのかけ引きに乗って行く。正月休暇の外出に、はしゃいだ報酬を払わされ、目を白黒したものがいたことも事実である。

安芸郡芸濃町雲林院の保地福生さんは、この当時一大隊本部書記の軍曹だったが、



吉田分隊

「南京で正月を迎えたときは、もうこれで内地へ帰れるかもしれないという気があったし、とにかくうれしかったですね。しかし、私たち本部書記のものは、戦闘が終わると功績書類をつくったり、戦闘詳報をガリ版ですったり、連日目のまわるような忙しさで、のんびり遊ぶなどという暇はほとんどありませんでしたよ」と語ってくれた。

こうしてしばらく、剣を収めている城内や城外周辺の部隊に、だれいうとなく歌われた唄がある。これが、このさのさ節「南京城」です、と綴って下さったのは、四日市市諏訪町一〇一二、トヨタ燃研（株）社長豊田次郎さん。

次から次へと唄った思い出深い「さのさ節」。懐かしい遠い記憶を呼び起こしました、と。

さのさ節（南京城）

もみじ葉の嵐と散りし戦友の

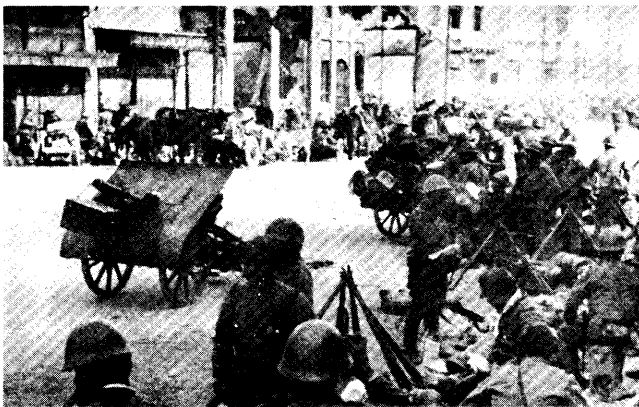
聞くも哀れや秋の調

濡れる空の江南に

はかなく散りし戦友の

墓標眺めてさめざめと

言葉



南京突入後の小憩風景

「おお、君。君は戦死したのか。雨にぬれ、風にさらされ、共に共に弾丸の下で働いてくれた君は戦死して、僕一人故郷に還るのは実に、実に残念だ」

詩吟

男子志を立てて郷関を出ず

戦い勝たずんば

死すとも還らじ

言葉

而し君、悦んでくれ給え。わが精悍なる大和魂は、多くの犠牲は出たれども、南京城はわが手に期したのだ。君の魂魄も護国の華と散り、悦び瞑目してくれるだろう。

詩吟

戦友の靈魂 慰むれど応えず

永別今となりて 再会なきを悲しむ

唄

散るは涙かね 袖ぬらす

別れに手向けし菊の花

(十) 軍紀で異例の訓示

——宣撫工作のなか「事件」——

南京に駐屯した連隊将兵はのんびりした生活で、前項兵の日記のとおり宣撫工作もすすんで行き、城内の一般商店、中国人の商店も続々店を開き出し、街は平和そのものである。

戦はもうすんだ。もうすぐ内地に帰つたらああもしたい、こうもしたい、と胸をふくらませて待ったが、いつこうにそれらしい気配が伝わってこない。講和は、成立しそうにない。この雲行きを、将兵はだで感じとっていた。一月も半ば過ぎて、部隊が再びどこかへ移動するらしいという話が伝わりはじめた。

○ ○ ○ ○ ○

最も勇敢に戦い、護国の鬼となつて果てた幾百名の英霊に捧げたいのは、悪名高い南京事件の真相についてである。筆者はこれを語らずに次の項に進み得ない責を感じる。連載して来たように、幾十幾百名の南京攻略戦参加者の方々が異口同音に、良民を虐殺したことは断じてない、と語られるし、筆者もまた目撃したことである。これだけは、胸を張つて語り継ぐことが出来る。

南京は外国権益が多く、また多数の非戦闘員や住民がいる関係上松井方面軍司令官、また朝香軍司令官殿下、中島師団長閣下、再三再四にわたる軍紀風紀の厳守と略奪、暴行、放火等の破廉恥に関する犯罪の発生を未然に防止すべし、の嚴重な布告通達がされてあるので、将兵一同身を修めるに峻厳であつたはずだが、これに洩れた者が絶無とはいわない。軍は法に照らし、軍法會議を開き、嚴重な処分を行ったこと

は事実である。

南京事件は、当時同地にとどまっていた諸外国の特派員が、生々しい戦禍の状況を、特に軍国主義日本の狂暴を印象づけようと強調して世界に報道したことが、極東軍事裁判及び南京の特別軍事裁判で取り上げられたもので、この両法廷とも処刑そのものを必要とする政略的理由によって行われたものであった為に、誇大に証言されたものであると考える。

一方当時の日本軍は、戦果を過大に報告することが常例であったため、「敵の遺棄死体は八、九万を下らず捕虜数千に達す」と発表、これが事実として取り上げられたのである。しかし、若干の事実はあったから、これが誤解、曲解され、さらに誇大宣伝されたのであろう。

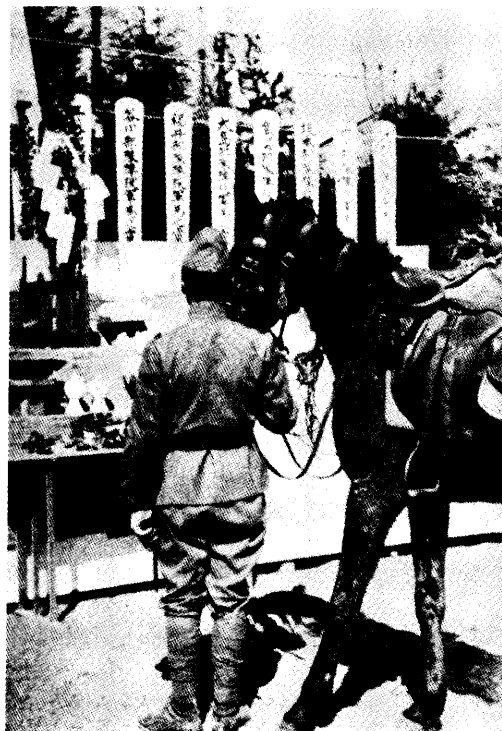
また南京攻略戦は完全包囲殲滅戦であったから、戦闘行動による中国軍の損害の多かったことも当然であったのだろう。特に、南京城陥落前後に生じた多数の非戦闘員や住民が、中国軍退却部隊と混雑し、軍に協力あるいは遊



南京の警備

撃戦に関与して対敵行動をとったことも被害を多くしたのではないだろうか。

南京の攻略戦開始当初の人口は約三十万。そのうち数万が作戦間に退避し、日本軍占領時には二十数万が難民区に集まっていた。ところが敗残兵の多くのものは、武器を隠匿して住民に変装し潜伏した。この便衣隊を住民の中から摘出檢舉することは非常な困難であったことが、無抵抗の住民に若干の犠牲を与えたのではないかと考えられる。



風景祭霊馬軍

また日本軍の攻撃部隊は中国軍に比し兵力が僅少であったので、戦闘行動中に投降する者があっても、これを捕虜として監視する兵力がなく、偽装投降の前例も多かったことから、日本兵の敵愾心と恐怖心から、殺すか殺されるかという切迫した状況下で、冷静な判断が出来難く殺傷したこともあったと思われる。これは、捕虜を遇するための設備や補給能力がなかったためでもある。これらは、作戦が猛烈な追撃戦であり、堅陣奪取作戦であり、市街戦であった特性上からくるものであり、日本軍の第一線部隊のみ

を責めることは出来ないものと考える。

以上、具体的に正確な数字を挙げて証言することは不可能であるが、南京付近の死体は戦闘行動の結果によるものが大部分であり、これをもつて計画的組織的な「虐殺」ということはないと証言する。しかし、たとえ少数であったとしても無辜（むこ）の住民が殺傷され、捕虜の処遇に適切を欠いたことは遺憾である。

昭和十三年一月七日、参謀総長が出征軍隊の軍紀風紀の肅正について異例の「訓示」を発し、陸軍大臣も同様嚴重な対策を講じた。

第十九章 「南京大虐殺」の真相

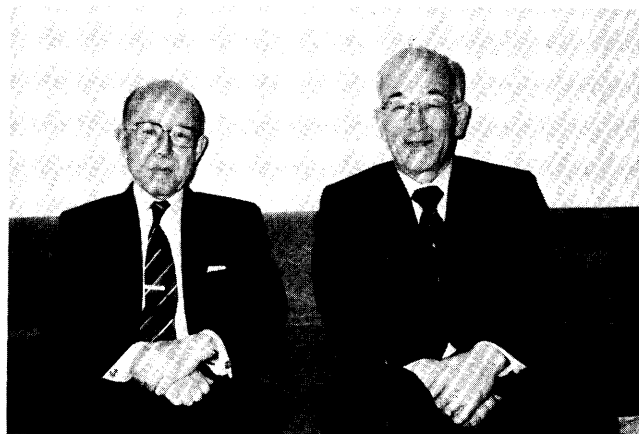
(一) 「大」の字は大げさ

——日本プレスセン
ター専務取締役 前田 雄二——

教科書の検定で、いわゆる「南京大虐殺」についての記述が問題になっている。検定でこの部分の表現を弱めるように修正したが、歴史をゆがめるものだというのである。検定による修正は「日本軍は中国軍民の多数を殺害、暴行、略奪、放火を行い、中国人の犠牲者は二十万人にのぼるともいわれた」「南京占領の日本軍は、多くの非戦闘員を虐殺」とあるのを、「中国軍の激しい抵抗にあり、日本軍の損害も多く、激高した日本軍は中国軍民の多数を殺害」「混乱の中で、中国軍民多数を殺害」というように書き改めさせたというものだ。しかし、検定前後の文章を較べてみると、あとの記述がはるかに事実に近い。南京で虐殺はあったかもしれないが、「大」の字をつけるのは大げさすぎる。日本軍占領時南京の人口は約二十万人になっていたのだから、全部殺してしまったのではないと数字が合わない。ところがこれらの一般住民は、日本軍の占領下にはいつて、二日目には「居住地域」で店をあげ、日常生活を回復していたのである。

私は当時（昭和十二年十二月）同盟通信社の記者として南京攻撃の前線に従軍していた。そして占領と

同時に城内に入り、数日間、市内の取材に走りまわった。一度、上海に戻ったが、翌年二月にはまた南京に赴いて、一カ月駐在した。ということは「南京大虐殺」があつたとすれば、私がそれを知らないはずはないということだ。



日本プレスセンター専務取締役前田雄二氏（左）
と伊勢新聞社長 小林正雄

二年ほど前、私は書斎の整理をしたとき、古い日記を発見した。これは従軍記者として東京を出てから、上海戦、南京戦、そして漢口戦に従ったときのものだった。私はかねがね当時のことを記録したいと考えていたので、日記の発見を機会に筆をとりはじめた。それが週刊紙「世界と日本」（内外ニュース社）に一年半にわたって連載された「戦争の流れの中に」というドキュメンタリーである。そしてこの連載ものが、つい最近、一冊の本になって「善本社」から出版された。私が高稿の執筆依頼を受けたのは、この本のなかに南京虐殺の部分があるからである。私はありのままの事実を書いていたのである。

―日本軍が入城したときは略奪放火の後―

南京戦は激戦だった。陥落は昭和十二年十二月十三日だが、その前、七日には蒋介石政府は南京を脱出して漢口に政権を

移し、南京防衛は唐生智司令官に任されていた。日本軍は徐々に包囲の輪をせばめながら、九日には松井石根軍司令官が降伏勧告をしたが、唐生智はこれを無視した。そこで総攻撃は十日から開始され、十二日夜には、各城門が日本軍の手に落ちた。この間、城壁、城門の攻防をめぐって激戦が展開されたが、城内はすでに十一日から大混乱に陥っていた。政府関係者や富裕階層、それに軍隊の脱出が始まっていたのだ。脱出者の大群は、揚子江岸の城門から長蛇の列になってあふれ出て、あらゆる船舶を利用して、沈没、水死をだしながら対岸へ渡った。こうなると城内の治安が保たれるはずがない。空き屋になった家屋や商店、官庁などは、残留住民や中国兵などの略奪のまよになった。日本軍が入ったときは、すでに荒らしつくされたあとだったのである。

私は、南京城の正面ともいふべき中山門を攻めた十六師団の先頭部隊といつしよに十三日朝、南京市内に入った。しかし、まだ中国部隊の激しい抵抗があり、市街戦が展開された。官庁ビルの窓や屋上から機銃弾が飛来した。日本の部隊は、こういう拠点を一つ一つつぶしていかなばならなかった。そして完全に市内を制したのは午後四時だった。

すでに唐生智司令官はじめ軍首脳は脱出しており、防衛部隊は、日本軍にぜん滅にされるか、降伏するかのはずれかだった。拠点になった建物の中では、折り重なって倒れていた中国兵の集団があったし、黒煙や火焰をあげて燃えている多くの建物があつた。これらは逃げぎわに中国軍が火を放ったものだ。

こういう状況は、私は見なれていた。上海から南京に向かう途中、蘇州、無錫、常州、丹陽などを占拠したが、中国軍が抵抗せずに退却したところは、町がそのまま残っていた。しかし抵抗したところは破壊

のあとがひどく、特に市街戦が演じられたところは廃虚の趣きを呈していた。南京は最後まで抵抗したのだから死体の山、破壊のあとがすさまじかったのは当然のことで、この乱戦のなかでは住民の巻きぞえをくう者もあったことだろう。

すなわち略奪、放火は、陥落の二日前から行われていたのであり、多数の軍民の犠牲者は攻城戦の激しさのなかで生じたものである。

—一般住民の大量虐殺はない—

しかし、占領後、日本軍による「虐殺」がなかったわけではない。私は、自分の体験をそのまま「戦争の流れの中に」に書いているが、異常な見聞の第一は、占領三日目のことである。私は同僚とともに軍官学校の校庭で、捕虜の処刑を目撃した。校舎の一棟に収容した捕虜を一人ずつ引き出し、下士官がそれを前方の防空壕の方へ走らせる。待ち構えた兵隊が銃剣で突く。壕に転げ落ちると、さらに上からとどめを刺す。これが同時に三カ所で並行して行われていたのである。私は六人ほど見るのが精いっぱい、吐き気を催した。そして逃げるようにその場を去った。

第二の場面は、同じ日、交通銀行の裏で銃声がするので行ってみると、ほかの社の記者も来ていた。これも捕虜の処刑で、池のふちに捕虜を立たせ、背後から銃撃して池に落とすというやりかただった。第三は、揚子江岸の下関（シャーカーン）という町に出る把江門という城門に死体の山が築かれていたことだ。私は写真班といっしょに車で城門を出ようとしていたのだが、通路は一筋、死体の山の中央にあけられた空間を通るしかない。止むを得ず徐行して通り抜けたが、屍臭が漂い、不気味きわまる思いだった。

第四は、その翌日、揚子江岸に死体の山が連なっているとの情報を得て車を走らせたが、下関からさらに下った江岸におびただしい中国兵の死体が連なっていた。ざっと見て千はこえていた。帰って警備司令部の説明を求めると「少数の日本部隊へ万を超える中国軍が投降して来たので武装解除し、江北へ逃げていくことを教唆したら、われ先にと船に乗り、ジャンク船に乗り、板にまたがり、戸板を浮かべて脱出したが、とうていさばき切れるものではなかった。船に乗り過ぎて沈没するもの、乗り切れない者が船べりを離さないから揚子江に落ち込む、そこで殺傷が起こるということで、パニック状態になり、双方大乱戦となった勢が護送中の日本部隊を襲撃してきたため、機銃で掃射したものである」との答えだった。

【その前日、すなわち昭和十二年十二月十二日、紫金山の右側を急追中の歩兵第三十三連隊第一大隊第一機関銃中隊の小隊長田中浅次郎さん（志摩郡阿児町鶴方で食料品店経営）が「玄武湖を左に見て大平門や和平門の敵をけちらして下関に進出したが、出過ぎたため友軍の砲撃を受け、一時退却する騒ぎが起った。そのとき、おびただしい数の敵が先を争って揚子江を渡り逃げている。一枚の板にでも命を託して泳いでいる。船に乗り遅れた者は船を転覆させる。船の舷を離さない者は射殺する。同士討ちはする。生き地獄であつた。私たちは、これを止めさせるわけにはいかないので、ただ呆然と見ていた。上官も、これを攻撃する命令は下されなかつたし、むしろ中止させる方法はないか、と相談も受けたが、いかんとも致し方がなかつた。これが戦争だつたのだろう。こうしたことが、何万人という虐殺説に連なつて行つたのではないかと考えられる、」と語つて下さつた。（場所、日時も全く付合する）】

これらは「虐殺」のなかに入るかもしれないが、被害者合計はとうてい万の単位になるものではなかつ

た。総計三千ぐらいではないかというのが私たち従軍班の推定だった。しかもこれらは捕虜の処刑であり、はん乱の鎮圧だった。捕虜であれば殺害していいということはない。松井軍司令官は、こうした行為を含め、十八日の慰霊祭のうちに全軍に厳しい訓戒を与えている。それにしても、これは罪のない一般住民を大量に虐殺したということとは違うのである。

—中国の誇張拡大宣伝—

日本軍は、占領の翌十四日から住民居住区域を「難民区」と指定して、日本の将兵の立ち入りを禁止し、要所、要所には憲兵の見張りをたてて秩序の維持をはかっていた。私たちは同盟通信の旧支局が難民区域にあったので、十七日以降は区内の支局を復旧して活動の基地にした。区内はすでに商店、飲食店、錢莊など店を開き、日常生活を復活していた。いく度か戦乱をくぐった中国人の強じんな生活力に私たちは目をみはったものである。こうして平和を回復した住民区域で、日本軍は乱暴ろうぜきを働くことはできないし、もしあれば、区内で生活をはじめていた私たちの情報の網にかからないはずはなかった。

すでに「南京大虐殺」説については評論家の鈴木明氏が疑いを持ち、詳細な調査の結果を「南京大虐殺のまぼろし」という本にまとめ文芸春秋社から出版（昭和四十八年）している。ある程度の混乱はあったが、「大虐殺」などはなかった。それは「まぼろし」にすぎないというのが内容である。当時の中国側の「大虐殺」の宣伝は、南京占領までの前衛都市の被害から、陥落時の混乱まで、大都市攻略の過程で生じたすべての事柄を含め誇張拡大したものだったろう。当時、南京で、外電が「大虐殺」説を流しているということを知って、私は狐につままれたような思いで同僚たちと話し合ったことを覚えている。支局でも、軍

報道部でほかの社の記者と落ち合ったときも、あまりの事実誇張に驚きあったものである。こういう誇大情報を日本の歴史として定着させてはなるまい。

(二) 独断で捕虜を救う

——ある日中将が目前に：——

第十六師団司令部付経理部の主計軍曹であった百五銀行頭取、金丸吉生さん(七三)の話。

十二月十三日、南京陥落の日の夕方、私に三十三連隊の先遣隊と一緒に突入しろ、と命令されるので「主計がどういうことですか」まだ残敵が各所にたむろして機関銃や大砲の音がバンバンしており、各所に敵が退却の時放火した火災で黒煙もうもうとたちこめ、誠に凄惨、如何に戦場とはいえ後もどりしたくなっ

たので問い直した。隊長は、「兵隊が入ると各部隊で食糧の取り合いをしてしまうし、敗残兵や、現地人に荒らされる恐れもあるから、速かに敵の政府機関や軍需倉庫施設は全部封をしる。何人も入れてはならぬ」との厳命であった。

兵隊はつける(五十六人であったと思う)と命令された。戦場ではこれだけの兵力を割くのは大変なことと知っているので、勇を鼓して出発、片っ端から封印して回った。もちろん公設のものばかりである。



金丸吉生さん

下関（しゃーかん）に着いたのは、十三日夜か、十四日の明け方かは忘れたが、国営の大きな製粉工場が屋根をつらねている。日本でも見たこともない、大きな工場であつた。それを私に管理しろと命令されて、中に入つて見ると、真つ暗闇で、何がやらさっぱりわからない。電気会社にいたという三三連隊の福地少尉という人が発電機工場を修理してくれたので、中に入った。見ると、三百人位の敗残兵が頭に手を上げて隠れている。ぞつとした。皆、兵器を持つてゐる。そこで逃げたら、こつちの負け。大声で怒鳴つて、兵器を全部提出させ、裸にした。そして、一人ひとりを点検し、この敗残兵を全部使役に使うことにした。

この工場を調べると、小麦粉五万俵、原料麦十萬俵、フスマなどが数万俵（包装規格は日本と同じ）ある。すぐに、各食庫の前に歩哨を立てて確保。私は、事務所に頑張つて兵や敗残兵を指揮し、小麦粉は食糧、フスマは軍事用として各部隊に分配した。敵の軍官学校や金陵大学、七十七師、八十八師の兵営にいる捕虜にも、何十杯か数えきれぬ程、トラックでこの食糧を運搬して



軍服姿の金丸吉生さん

やったことを覚えてゐる。誰の命令もなしにですよ。私の独断ですよ。発覚すれば軍法会議送りという危険を犯して、捕虜を救った。そんなことは誰も知らないことである。

そのようにして、下関の工場整理していたが、十二月の末で寒い日でした。軍服だけでは寒いので、その上に支那服を頭からかぶって、股火鉢をしていたところ、前に誰やら、ぱつと立った。びっくりしたね。中將の肩章である。「お前はなんや、身に寸鉄も帯びず、大胆というか、不敵というか阿呆というか」

これが中島今朝吾中將、私達の師団長である。直立不動の姿勢で身動き出来ない程硬直した。そのとき何やら後ろから背中をつつくので、そつと手を回したら拳銃である。参謀が気をきかして私に拳銃を渡してくれたのであった。それで私は拳銃は持っていますと差し出したのでその場はすんだ。しかし、捕虜のことでまた叱られた。というのは師団の偉い人が来たというので通訳があわてて、捕虜を倉庫に閉めこんで隠した、これが悪かった。倉庫をあげられたら多数（三万人）の捕虜が座っている。

「これなんじゃ」

ということになって、また一から説明した。それは分かってもらったが、向こうさん（敵）の機関銃や兵器もそのままほうり込んであるので、

「お前は大胆か阿呆か分からんヤツだ。万一こいつらが兵器を使って反抗してきたらイチコロではないか」と怒られた。

「ハア」

というよりしかたがなかった。それはまあそれで済んだが、一月末日だったか、司令部へ行ったら經理

部長少將が、

「お前えらいことやったな」

という。また怒られるかと戦々恐々で、

「なんでございますか」

と聞いたたら、

「正月、軍司令官朝香宮殿下の祝賀会の席上で、師団長閣下が自慢して居られたぞ。『みんなの努力はよく分かるが、わが師団には一曹長の身分で大胆不敵にも身に寸鉄も帯びず、下関の大製粉工場を占領し連日友軍各部隊に捕獲せるトラックによって何十杯も食糧を運んでいる者がある。その運転手も使役も全部捕虜をして行わしめている』とえらい自慢しておられた」

この倉庫には食糧の他被服類も多数集積されており、すべて師団で占領した。私が使っていた捕虜は食事には事欠かず、衣服は十分であり、喜んで働いてくれた。

南京虐殺二十万人というようなことは誤解である。私たちは南京陥落と同時に城内に入り、中山路の左側や中山北路の左側市民居住区はただちに憲兵が綱を張り、日本軍の立入りを嚴重に取り締まった。

私たちが封印して回っているところでもあるから、よく知っている。戦死した者は双方に多数あっただろうが、良民を虐殺したということはまっぴりかたと思う。

人間、何が辛いやらわかりませんね。私は戦前は歩兵で満州へ行きました。支那事変中は主計で、大陸を歩き大東亜戦争は航空で南方まで行った。が、帰って来たらみんな田畑を取られていたから、食っ

ていくことが出来なくなつて銀行に力を入れるようになった。

「人間若い時代は、精神力により自分の体力の限界以上の仕事にも耐えられるという事と、困苦欠乏に耐える精神は平和な時よりも非常の方が養われやすい」と軍隊の経験から知った。

戦争中の苦難と、欠乏に耐えることを体験した私たちは、ある面で幸せであつたと思う。

あの南京攻略戦の最中、もう南京入城も間近く紫金山も目前にあり、第一線は紫金山で肉弾相打つ激戦が展開されて、思うように行動出来ないで、われわれは砲弾を避けて前進したが、もうこれ以上進めなといわれて、焼け残つていた二、三軒の家の部落へ着いた時はすっかり日も暮れており、仕方がないのでそこで大休止することになった。

空腹のあまり家の中で、天幕で火を囲つて飯ごう炊さんをすることにした。これは夜間の火は砲撃の目標になるので厳禁されていたからである。まず、米を洗う水が必要である。何処かないかなアと表へ出て探したら薄明りに水が光つて見える。これはありがたい、と走つて行つた。そこは小さな池であつた。皆がそこへ行つて米をとぎ、ようやく飯を炊くことが出来た。そのおいしかったこと。そのころは強行軍の連続で久し振りに米飯にありついたので人間らしく落ち着いた一時だった。その晩は前線の都合で、そこで仮眠をとることになり翌日早朝出発となつた。

うとうとするうちに夜明けになつて出発のため軍装を整えて表へ出た。昨夜、米を洗つた池のそばを通ると、なんと敵兵の死体が十数人、池の中で浮いている。われわれは昨夜、敵兵の雑炊のご飯を食べたものである。どうりでおいしかったのかと笑つて通り過ぎたものの、急に吐き気をもよおすやら、腹の調子

がおかしくなるやら、とにかく正露丸をほおぼったが、今でも思い出すと気持ちの悪くなる話である。

満州（今の中国の東北三省）へ行ったときは、初年兵で一期の検閲も済んでいないとき、慶応出の配属将校だった方が十六師団の参謀であつたためか「金丸、参謀部の兵要地誌班へ来い」といわれたのでなんのこともわからないまま師団司令部へ行つた。

最近中ソ国境の紛争は絶えず起こり、危険な状況にあるとの報道を聞かされるが、そのたびに思い出されることは、当時のソ満国境の黒龍江沿岸をさかのぼって、対岸のソ連軍陣地の偵察行に従事した時の事だ。

昭和十年の秋、北満では、すでに霜はもちろん、薄氷も張っていた九月初め、命により編成された第十六師団の参謀部の兵要地誌班の一員としてソ連領ブラゴウエスチンスクの対岸、満州国の黒河の町を出発、黒龍江と支流ゼーヤ河の分岐点を基点としてわれわれの一行は黒龍江沿岸に沿って遼江（そこう）を始めた。

もちろん、隠密行動の事として、ロバに荷物を積んだ一行は対岸の「トーチカ」の所在を確めては沿岸の一地点に基点を作り、そこを基準にして角度を計り距離を計算して、日ソ万一の場合の砲撃に備えるための仕事をしたのである。

昼はその基点の目じるしにコンクリート杭を打ち込み、夜は天幕内の洋灯の下で数字のサイン、コサインによる距離の計算、風速の計算も加えて色々と砲撃の場合の計数を算出する。すなわち、風速何メートルの時、砲の角度とか目標を何にするかの答を出す。こうして一日一日が行軍と計算の明け暮れだった。

一方では写真図班の活躍もあった。

出来上がりを見ると一連のもので実に立派な正確なもので、驚いたほどだった。

北満の野に咲く黒百合のかれんな花も、もうすっかりしぼんでいた。フロに入らない露営行が続けられ、満州の最北端「漠河」に到着したころは満目荒涼の雪野原で、最高最低寒暖計は氷点下五十度を示す日もあった。

手足の冷たさは言葉や筆には言い尽くせない。不潔な話だが、肌着は半風先生（シラミ）の巣だった。

目的を終わり一直線にそりに乗って、チチハルの妙健益に帰ったのはその年の暮であつたと記憶している。

こんな記録は今にして思えば、日ソ開戦に備えた軍の作戦の一部であつたのである。当時は絶対に口外しないよう固く口止めされて原隊へ復帰した。その日の暮れ、

「諸民の今回の働きは、大日本帝国の将来のために非常に貢献する基礎を作ってくれたものであり、これに報いるため何か品物をやりたいが、それを渡すと誰かにその品物をもらつた理由を聞かれた時、必ず内容を言いたくなるものである。だから何もやれない。せめて二日間の休暇を与えるからゆつくり休め」と五円いただいて外出した。

とてもうれしい感激の一瞬であり、まるで自分が日本のために一身を捧げたような錯覚をおぼえ、異常な興奮を感じた。

第二十章 和平論争

(一) “最大”の和平工作

——駐日独大使に条件伝える——

中支那派遣軍司令官以下南京占領をもって戦は終結することを願ひ、これが最後の攻撃だと勇奮死闘を繰り返し、紫金山を占領した、その郷土部隊勇士は、南京を掃討すると治安が回復するに従い街々へ外出し、がい旋の土産物まで用意して帰還を待ったがなかなかにおつて来ない。うわさもない。何故だろう。まだ戦争を続けるのだろうか。今度は何処へ行くのだろうか。待ちに待った帰還が何故出来ないのだろうか。この真相については戦に参加した者、また御遺族の方々の知りたいところではないだろうか。それはまた、この項を編集する者の責任であると考え、知る限りを簡明にまとめてお知らせして行きたい。

柳川中将の率いる第十軍杭州湾上陸によつて、上海付近の中国軍は雪崩をうつて退却を開始した。南京進撃には政府および軍中央、ならびに現地軍にも異論はあつたが、松井中支那方面軍司令官は、すでに東京を出発するときから南京陥落をもつて終局にしたい願望でもあつた。これを統帥部の下村定作戦部長らにも話し、その支持も得ていた。(このとき支那事変不拡大を唱えた石原莞爾少将は関東軍参謀副長に転補



第十六師団長時代の石原莞爾氏

され、関東軍参謀長東条英機は田中新一を率いて蒙古作戦中より帰還するやいなやこれを痛烈に批判し、石原、東条は犬猿の仲となり石原は軍主流から疎外される運命となった。こうした中で南京進撃は開始されたのであった。

ところがこの作戦には、実は政略両面の大望が秘められていたのである。それが軍統帥の首脳、すなわち石原莞爾第一部長の指導下にあつた参謀本部戦争指導課においてである。

中国は古来面子を重んずる国である。したがって南京を目指して破竹の進撃を続ける方面軍を、南京城外に停止させ、南京を攻略することなく、近衛首相を特使として単機中国軍の手中にある南京飛行場に着陆させ、蔣總統に日本の真意を伝えようというのであつた。南京攻略以前ならば、中国側の面子も保てる。しかも直接腹を打ち明け膝詰で話し合えば蔣介石ほどの人物である、必ず氷解霧消、和平への道は開ける

であろう、と確信を持つて提案したのが参謀本部戦争指導課である。そして特使一行に随行して、万一交渉が失敗したならば、南京街頭に晒されるだろうがもって瞑とすべきである。このような事態に陥ったときこそ、国民の戦争意識を高揚させ、挙国的世論の統一が図れると、同じ籍にあらせられた秩父宮殿下も深く感動されて、決死の勇をお認め頂いたのである。

かく南京陥落直前を和平の絶好機と決断したこの勇も、

近衛首相の陸軍統制力への不信から立ち消えになったが、一方で軍務局長町尻少将らが中心となって駐華独大使トラウトマン、駐日独大使デイルクゼンを介して和平工作が行われていた。これが日華事変史上、最も実現可能にして最大の政略的和平工作といわれたのである。

昭和十二年十二月七日、トラウトマン駐華独大使の連絡により、駐日独大使デイルクゼンは広田外相を訪問し、国民政府が領土主権の保全を条件に、先に提示されていた日本側の条件を基礎に、和平交渉に応ずる意図のあることを伝えて来た。このときデイルクゼン大使は、その後の日本側の条件に変更はないか、ということの特にただした。ところが広田外相は、すでにその後ののはなばなしい軍事的成功を背景に、和平条件の強化されることを示唆し、前とは打って変わった強硬な態度であったという。

そのときの条件とは、

- 一、満州国の承認
- 二、防共協定の締結
- 三、排日運動の停止
- 四、北京・天津付近の非武装地帯の設定
- 五、華北地区の対外機会均等である。

連戦連勝の軍事成功は、政府及び軍部の和平条件に対する圧力となり、国民も戦争の将来に安易感を抱くようになって、昭和初期から不景気の苦しみをいやというほど味わってきた多くの国民は、戦争によって軍需景気が盛り上がり収益の向上がみられ、生活が安定してくるとかえって軍部の尻を叩く強硬論者に

変わっていったのである。また、政府対政府の外交交渉が、ドイツを仲介者として開始されようとする矢先に、相手政府の否認論や華北新政権の樹立運動が裏面で行われていたのであった。まさに戦争指導体制の弱体である。しかし極論すれば、政府（後日判明して来るが）、軍部内においてすら面倒な和平交渉の手段を経なくても、武力によって国民政府を早期に屈伏させることが出来るものと信じていたのであった。国民政府はやがて地方政権になりさがって、中国大陆の主権者たる資格は失われるものと信じられていた。

（二）閣議決定取り消す

——軍と政府が条件を審議——

果たして和平条件の修正をめぐって、政府は約二週間にわたって收拾しがたい混乱を巻き起こしたのである。しかも、この工作の中心となるべき広田外相が、近衛首相と歩調を合わせたかのような外交指導の欠如や、統帥部の主張による外交工作に不満を示して、真の協力が行われなかったのであった。（ここらが文官による戦犯処分の因の一つにもなっていると見られる）

戦後の回想によると、トラウトマン工作の失敗は、広田外相の参謀本部への不信にあった。軍が外交に介入したというセクシヨナリズムにあったのではないか。

十二月十日、紫金山総攻撃が下命された日の閣議の席上、広田外相は、「多くの犠牲を出した今日、このような輕易な条件では、和平を認めることは困難である」と発言し、その上「敗者としてのあいさつまことに無礼である」と中国側よりの回答を拒否したのである。これには末次内相、近衛首相、杉山陸相も同

調し、全閣僚の賛同を得て閣議決定、そして拒否した。

今日からみれば、中国軍の抗戦力の過小評価と、中国民衆のなかに澎湃（ほうはい）と湧き起こって来た民族主義の軽視と、国際情勢の判断の甘さであったと批判されるが、果たして当時誰がこれに反対したのか。この怒濤に敢然と立ち向かい、参謀本部の一角に仁王立ちしても阻もうとしたのは、石原莞爾作戦部長の流れをくむ（石原莞爾中将も今日では批判の対象になっているが、支那事变阻止不拡大努力は高く評価されるべきである）参謀本部戦争指導課長河辺虎四郎大佐以下堀場一雄、高島辰彦、今田新太郎各少佐等の参謀であった。

この閣議決定の報告を受けた戦争指導課は、「閣議の結論は国家の前途を誤らしめるものである。まさに今日こそ国家危急の非常時として、閣議決定を取り消さん」と決起した。

三参謀はそれぞれ分担して多田参謀次長、梅津陸軍次官を説得し、高島参謀は閑院宮参謀総長邸へ伺候したのである。

「いやしくも外相が先方に一旦和平条件を提示しながら、今回の回答を拒絶することは、国際信義を踏みにじることになり、日本は結局口実を設けて戦争を継続しようとしている



支那事变当時の近衛内閣の閣僚

のだ。斯くすることは侵略者の烙印を押されることになる。如何に大義名分をおし立てて聖戦を呼号すれども、この一挙で水泡に帰すことは明瞭である。何故拒絶する前に、日本が望む和平条件を明らかにして、中国の申し出を取り上げて交渉しないのか。相手を無礼呼ばわりして具体的な交渉もしないというのは、戦勝に奢（おご）れる証拠で、このようなことで、どうして日中両国が兄弟のよしみを結ぶことができるのだ」

と明弁をふるって迫った。今日からみれば、胸のすくような啖呵（たんか）であるが、あの当時これだけのことを叫ぶ人が他にあったろうか。たちまち投獄、首が飛ぶのは覚悟の上でなければならぬ発言である。これを受けた梅津次官も偉かった。

「私の部下に、今までこのような意見具申をするものはなかった。さっそく、大臣に意見を述べて閣議決定を取り消す」と快く了承した。かくて閣議決定は取り消され、十二月十四日開かれる大本営・政府連絡会議で、和平条件の審議が行われることになった。ここまでの梅津次官は、大次官の面影を遺憾なく発揮している。

戦争指導課すなわち陸軍統帥部は閣議決定をくつがえしてまで、トラウトマン独大使の仲介を何故和平への絶好のチャンスと見たか。ドイツは事変勃発以前から国民政府に軍事顧問団をおくり、経済的にも軍事援助をしていた。したがって、ドイツと国民政府の密接な関係を考えれば、ドイツは日本にとって好ましい仲介者であった。しかも当初、広田外相から提示した和平条件は、満州国の承認に柔軟性をもたせれば、ほとんど無条件に近いきわめて寛大なものであったから、この条件の内容を知った統帥部（戦争指導

課）は、これならば交渉過程で多少条件の変更があつても、何とか中国側の面子を保ちながら、和平を結ぶことができると思つたからである。

(三) 新和平条件が決定

——受託し難い中国に押しつけ——

南京陥落の翌十二月十四日、首相官邸で開かれた大本営・政府連絡会議の席上、石射猪太郎外務省東亞局長によつて和平条件の政府原案が説明されると、思ひ上がった一部閣僚の強硬論によつて、和平条件が加重されてしまつた。さらに翌十五日、会議は続行され華北臨時政府の問題に顧慮することなく、国民政府と折衝することが決定された。これは政治的に大變な矛盾である。白熱の大本営・政府連絡会議は続けられ、翌十六日正午の陸相官邸における昼食休憩の席上、統帥部堀場少佐參謀より御前會議の要請を提案して討議されたのであつた。

その理由は、外務省の交渉が日中兩國提携という根本理念を忘れたかのような事務的折衝で、きわめて低調である。しかもはなばなしい戦勝とともに、次第に増大してきた侵略的欲望を憂えざるを得ない。今こそ戦争解決に導かなければ、両国はその機会を永久に失う。幸い、各方面の意見が一致している現在こそ、これを確固不動のものとして、和平促進に邁進しなければならぬ。そのためにも、この方針を御前會議の決定事項として、ゆるぎないものにしておきたい、という考案であつた。その後は、御前會議の要請をめぐつて、堀場參謀は關係方面に猛運動、交渉に当たつて行つたのである。

十八日に至り、十四日の連絡会議で一応の決定をみた新和平条件が連絡会議に出席した閣僚以外は、すべて不同意という不統一ぶりであった。これは何故か。裏面で画策暗躍した恐るべき魔手ゾルゲ一派の活躍が奏功したのである。こうしたことを知らずに二十一日、次のような新和平条件が決定された。これは、中国が受諾し難いことを承知で押しつけたのであった。

一、満州国の承認。

二、反日政策を放棄する。

三、華北、内蒙に非武装地帯を設定。

四、華北には中国主権の下に日満中三国の共存共栄を実現する機関を設定する。

五、内蒙に防共自治政府を樹立する。

六、防共政策を確立し、日満両国に協力する。

七、華中占領地域に非武装地帯を設定、上海については両国が治安の維持および経済発展に協力する。

八、日満支三国は資源の開発、関税、交易、交通、通信、航空等に所要の協定を締結する。

九、賠償を支払う。

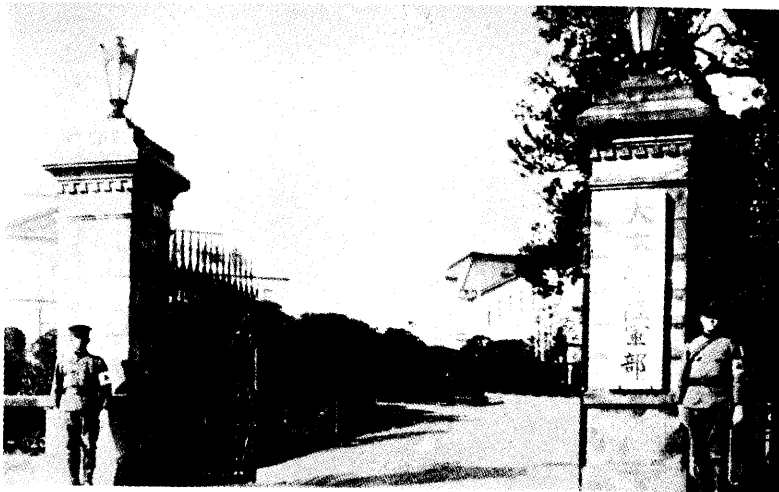
こうして翌二十二日、広田外相はデイルクゼン駐日独大使に、十二月三十一日の回答期限付きで新和平条件を通達したのである。デイルクゼンは、新条件が交渉を困難にすることを予想したが、直ちにドイツ本国へも報告した。

トラウトマン駐華独大使から中国側に伝えられたのは、十二月二十六日であるといわれている。

一方、統帥部第二課（戦争指導課）は、御前会議開催の要請で孤軍奮闘していたが、日露戦争以来開かれたことのない御前会議には陸、海、外の三省は容易に賛成しなかった。二十九日、有力な和平支持勢力であった高島参謀の病気が全快し、出勤した。同課に在籍下さる秩父宮は、まだ御静養中であつたのが残念であるが、今田新太郎少佐、高島辰彦少佐、寺田雅雄少佐、堀場一雄少佐の奮闘振りは目を見張るものがある。

隣の部屋に控えるのは戦争拡大の急先鋒である第三課（作戦編成動員）課長、武藤章大佐であり、陸軍省の軍事課長、如増新一大佐である。これら統制派の元凶を向こうに回しての孤軍奮闘は、国家国民のかん難を救出しようとする第一線の兵士と変わらないのである。

翌三十日、陸軍省の柴山軍務課長からの連絡で、堀場参謀は外務省東亜局長室に車を飛ばした。そこには、柴山大佐と海軍の戦争完遂論者保科善四郎海軍軍務局第一課長が来ていた。



当時の大本営陸軍部

「私が戦争目的の確立を説くと、それは去る議会において支那に反省を促すの詔書に明らかなり、という。この戦争処理の根本理念不一致は、戦果による欲望の増長であつて、これをそのまま放置せんか、戦争終結は望むべきも非ずとし、戦争目的の根本理念を明確にし、これを具体的に律するを要す。両者相譲らず、激論の末保科大佐用務に托して座を去らんとするに、私は斯くのごとき重大事を後廻しにして他の要務のあるはずなし、と決定を迫つた。保科大佐は立ちたるまま、再び激論。保科大佐興奮して顔面蒼白唇の色みるみる変る。彼逆上して短剣を抜き迫り来たらんとする。私は秘かに期するところありて水月の如し。尚も応酬を続けたれば、漸くにして保科大佐屈し、東亜局長亦これに応ず。ここに御前会議促進の運びとなつたのであつた」と、その堀場参謀の遺著『支那事变戦争指導史』にある。

(四) 白熱の論争、結論出ず

——打切り論と継続論が対立——

こうして御前会議は、昭和十三年新春早々と決定されたのであつた。参謀本部戦争指導課は、中国側からの回答期限を年末、一月五日、十日と引きのびしながら一日千秋の思いで待つたのである。

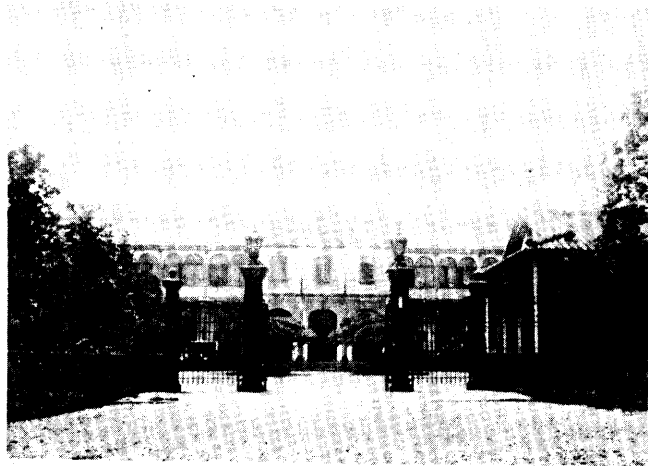
十二月三十一日の高島辰彦参謀の日記には、

「御前会議の議題たる処理方針につき研究、ドイツとの交渉も成立の公算漸増の望あり。軍事課との交渉相変らず不快なり」とあるごとく、ここにある課長が田中新一大佐である。

こうして昭和十二年の除夜の鐘は鳴り、正月早々事変は和平解決に成功するものと信じ、数日後に迫つ

た御前会議では、事変勃発以来半年にわたる戦争指導課員の努力が実ると、明るい正月を過ごした。

昭和十三年一月四日、参謀本部に出勤した戦争指導課一同は、いまだ中国側の回答が到着していないので、政府に回答期限を十二日まで延期することを申し入れた。



陸軍省正門（三宅坂）

一月六日、病氣静養中であった秩父宮殿下も出勤された。殿下の健康状態はまだ出勤には無理であったが、「中国側からの回答が遅れているので、じつとしていられないのです」とお述べになられたということである。

この時点で戦争指導課は、まだ和平交渉成立の望みを抱いていたので、回答期限をさらに延期することを要請し、十五日まで引きのばすことができたが、政府側は強硬で、この日をギリギリの最終日と決定した。しかし翌七日になって、内閣書記官長の新聞発表で、ようやく政府側に和平成立の熱意がないのではないかと不安をもちはじめた。果たして九日の大本営・政府連絡会議の席上、政府側の態度に和平交渉に対して動揺の色がみえた。日露戦争以来初めて開催された一月十一日の御前会議では、閑院宮参謀総長、伏見宮軍令部総長、平沼枢府議長の陳述が行われたが、最終的態度を決する

ことはできなかった。すなわち和戦両様の構えで、交渉決裂のさいは、以後の事変解決には国民政府に期待せず、親日政権を育成していくことが確認されたのである。

そしてこの夜、外相はディルクゼン駐日独大使に対し、

「十五日まで回答なき場合は、拒絶せるものと認む」

と通告したのである。この十五日という期日は、二十日より開会される議會対策が含まれているのであった。ここに至つて、戦争指導課は「形勢われに非なり」という情勢判断を下さざるを得なかった。

一月十三日、ディルクゼン独大使から、中国政府からの連絡事項として、日本側の要求条件はあまりにも抽象的であるから、さらに詳細な内容を知りたい、という申し込みがあったと連絡されて来た。これを日本政府は、「誠意なき回答」と判断したのである。すでに国民政府は和平条件の内容を十分に承知しているはずであるというのであった。しかし戦争指導課は、御前會議決定に基づき、日中国交調整方針の根本的な思想を中国側に明らかにし、さらに和平条件を率直に説明して、中国に和戦何れかの態度を決定させる必要があると力説して譲らなかつた。

一月十五日、最終回答期日である。戦争指導課は、中国からの連絡事項を議題に、最後の大本營・政府連絡會議が開かれるのに先立ち、多田参謀次長、河辺第二課長を第一會議室に囲んで、會議事項の研究討論を重ねた。高島参謀らは、十三日の独大使の申し込めは、中国側の最終回答ではないものとして、

「いたずらに期日にこだわり、挙国的決意の不十分なまま前述の暗い長期戦に移行する不利を説き、本日連絡會議は決定保留のまま、もうしばらく時間をかけて中国側の確答を待つべきである」と強く主張

し、さらに堀場参謀は、

「政府はいまだ戦争が長期戦となる困難な実体を認識していない。もし否認宣言をどうしてもするといふのであれば、それは改めて御前会議において決定すべき事項である」

と多田参謀次長に強調した。

多田参謀次長は、これまでの戦争指導課（第二課）の意見を全面的に支持していたのである。課の懸命な努力をよく承知していたからである。だから、課員一同に対して本日の会議は必ず決定保留させることを確約し、大本営側の代表として午前十時首相官邸の連絡会議に臨んだのである。閑院宮参謀総長は、皇族であるという政府側の意見により欠席となった。

政府側からは近衛首相、杉山陸相、米内海相、広田外相、末次内相、海軍からは古賀軍令部次長らが出席した。会議は予想されたように初めから白熱した。広田外相の交渉打ち切り論と、多田参謀次長の継続論が前回に続いて激しく対立した。広田外相は、

「私は長い間の外交官生活からみて、中国側の態度は、和平解決の誠意のないことは明らかであると信じます。参謀次長は外務大臣を信用することができませんか？」

と発言し、多田参謀次長を直視した。また杉山陸相は、

「期限までに回答のないのは和平の意志がない証拠である。蒋介石を相手にせず、屈伏するまで戦うべきである」

と同調し、米内海相も珍しく強い口調で、

「政府は外務大臣を信頼しております。総帥部が外務大臣を信用しないということは、政府不信任であります。それでは政府は辞職せざるを得ないのです」

と迫ったので、多田参謀次長は涙を浮かべて、

「明治天皇は、かつて『朕には辞職はありません』と仰せられました。この国家重大の時期に、政府が辞職するなどは一体何ごとでありますか」

と、悲壮な面持ちで論を弁じた。だが、白熱の論争は正午になってもまだ結論が出ず、ついに昼食時の休憩となり、多田参謀次長は一応参謀本部へ帰った。

(五)

「御前会議で裁決を」

——秩父宮殿下、異例の具申——

ここで読者に錯覚されては困るので、もう一度申し上げるが、陸軍統帥部が交渉継続で和平交渉に執着し、陸軍省を含む政府側が強硬論の交渉打ち切りなのである。統帥部が作戦上、現在では和平は不利だとか、不可能というのであればわかるが、軍を動かす作戦責任者の統帥部が和平交渉の継続を望んでいるのである。何か反対のような気を起こさせるが、それが事実だったのである。

多田次長の昼食がすむと、河辺第二課と高島、堀場両参謀が次長室を訪れ、午前中の会議の模様をたずねた。多田次長は、最後まで初志貫徹することを約束して三名を安堵させた。高島、堀場両参謀が課に戻ると、他の部員らは不安気な面持ちで待っていた。秩父宮殿下もやや蒼白な表情にあらせられた。ある

いは病後の故であつたかもしれない。堀場参謀は多田次長からの報告を部員一同に説明した。最後に状況すでにわれに不利と判断し、あとは多田次長が何処まで頑張ってくれるかが問題である、という結論になつた。すると、じつと堀場参謀の説明を聴かれていた秩父宮殿下が、他の部員に、

「私が直接多田次長に意見具申したいことがあるから、連絡せよ」

とお命じになつた。秩父宮は十三日のデイルクゼン駐日独大使の連絡以来、政府と参謀本部の対立を御心配あそばされながら、何とか交渉継続に持つていこうと苦慮下されており、あくまでこの対立が解けない場合には、例外ではあるが、この論争を御前会議にかけて、天皇の強い平和への御希望におすがりしようとの考えからであつた。

実は秩父宮は、このことをしばしば高島参謀に早くから進言していたが、さすがの高島参謀も、これば

秩父宮殿下

かりは簡単に多田次長に意見具申するわけにはいかなかった。当時、いかに重大事とはいつても、天皇の裁決を仰ぐことは、まさに前代未聞のことだったのである。そこで、ついに秩父宮殿下御自身でこの型破りの重大な意見具申を行うことを決意されたのであつた。以下、河辺作戦課長の回想録および手記によると、次のとおりである。

「当時、下村定作戦部長は病床にあり。後任の橋本群少将は未だ到着していなかつたので、多田参謀次長は、作戦



課長である私に同席を命じて、次長応接室に殿下をお迎えした。殿下は、この際、和やか戦いかの両国民族の将来に及ぼす重大性についての信念を、道義の上に立つて懇切丁寧に直接多田次長に述べられ、この重大な案件は、是非とも御前会議にかける必要があると主張され、陛下の清らかな大御心の鏡にうつされて、その御裁決をお願いすべきであると強く次長にすすめられた。多田次長は、殿下のお言葉を深刻な面持ちで静かに傾聴していたが、やがて感激の色を面に現わしながら、御前会議を奏請して陛下の御裁決を仰ぐことは、『如何に国家の重大事とは申せ、文武当局の意見が合わぬとて、陛下の御裁決を仰ぐということは、いつさいの責任を陛下に負わせ給うことであり、輔弼の重責を放棄する違憲の行為である』との意見を述べ、『如何に殿下の御意見なればとて、この件ばかりは従いかねます』と言いつつ、これを黙然と聴かれていた殿下は深くうなずかれて『よくわかりました。他に申すこ



作戦指導課参謀本部での秩父宮殿下

とはありません』と多田次長に対し、上官に対する敬礼をされて静かに応接室を去って行かれた。

秩父宮殿下を廊下までお見送りした多田次長は、やがてぼつんとつぶやくように言った。

『ありがたいことだ』と。時刻は午後二時であつた。』

(七) 幻の御前会議奏請

——「交渉打ち切り」に屈す——

大本営・政府連絡会議は依然として紛糾を続け、夕刻の休憩で再度参謀本部へ帰った多田参謀次長は、直ちに総務部長中島鉄蔵少将、本間第二部長を次長室に招いて協議した。この間、陸軍省の杉山陸相秘書官山本茂一郎中佐と町尻軍務局長が、中島総務部長を訪れたので、会議を中座して中島総務部長がそれぞれ会見するとともに、

「今日の問題を多田次長が了承しなければ、内閣は必ず総辞職となる。その内外におよぼす影響はまことに重大であり、その責任は統帥部にかかる」

と協力を要請した。形こそ協力要請の申し入れということであつたが、いいかえれば一種の圧力である。後に秩父宮をはじめ戦争指導課は、これを政府側の圧力と解したのである。

中島総務部長は再び次長室に戻って、山本中佐や町尻軍務局長の申し入れを伝えて協議した結果、

——中国側の態度が原因で内閣を崩壊させることは、統帥部として承知することはできない。今日の会議に同意することはできないが、政府に一任する、ということに決定した。ついに多田参謀次長が圧力に屈